追悼　安江明夫氏
―氏が説いたこと、私が取り組んだ公文書館の「資料保存」の羅針盤―

資料課　木本 洋祐

はじめに

安江明夫氏は、図書館・アーカイブズが収蔵する資料の保存・利用に関わる営み、いわゆる「資料保存」の泰斗であったが、2021年１月に75年の生涯を閉じられた。その死去を伝える新聞記事には「元国立国会図書館副館長」とあったように氏は長く国立国会図書館（以下、NDL と略記）に勤務し、1980年代以降は社会問題ともなった「酸性紙問題」に、NDL 内で、さらには日本図書館協会（以下、JLA と略記）等の関連団体での活動や海外の諸機関との交流を通じて深く関わる中で我が国の「資料保存」のあり方を主導してきた。その足跡は JLA 資料保存委員会会報に掲載された「安江明夫（資料保存関係）略年譜」(1)に詳しい（「略年譜」の一部を表にまとめた表１「安江明夫年表（簡略版）」も参照）。

2006年２月に NDL を退職した後も安江氏の「資料保存」に関わる活動は止むことなく、2008年４月からは学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻における資料保存科目の担当講師に着任し、その後８年間にわたり、行政文書から地域の郷土資料など広範な記録史（資）料を扱うアーカイブズ学を専攻する学徒に対して「資料保存」の理論と実践を説いた。

安江氏と筆者の接点はここに始まる。筆者は、文化財的な資料の保存修復について東洋美術学校高度保存修復専攻で３年間学んだあと、2011年４月から氏の資料保存論を受講することを主目的として学習院大学院アーカイブズ学専攻の科目等履修を始めた。折しもその１ヶ月前の３月11日には東日本大震災が発災し、東北の諸地域では行政文書から民間所在資料などのアーカイブズ資料に甚大な被害が及んでいた。発災から２ヶ月後の５月には、安江氏を代表者とするボランティアグループ「東京文書救援隊」が設立され、被災資料を救済するための実践的な方法論と具体的なツールの提供が始まった。筆者は、その活動への参加の意向を氏へ伝えたところ、逆に氏から「神

表１　安江明夫年表（簡略版）

		NDL（国立国会図書館）		JLA（日本図書館協会）
昭和 44 年	1969	10 月入職	図書課	
昭和 45 年	1970			
昭和 46 年	1971			
昭和 47 年	1972			
昭和 48 年	1973		一般参考課	
昭和 49 年	1974			
昭和 50 年	1975	10 月派遣（カナダ・モントリオール大学　東アジア研究所）		
昭和 51 年	1976	派遣（同上）		
昭和 52 年	1977	派遣（同上）		
昭和 53 年	1978	9 月帰国（同上）		
昭和 54 年	1979		連絡部国際交換課	
昭和 55 年	1980			
昭和 56 年	1981		総務部企画教養課企画係長	
昭和 57 年	1982		総務部企画教養課企画係長	
昭和 58 年	1983	7 月酸性紙対策班班員、8 - 9 月調査、11 月ｼﾝﾎﾟ	総務部企画教養課	
昭和 59 年	1984		連絡部図書館協力課	図書館大会（大阪）で資料保存分科会＜企画運営＞
昭和 60 年	1985	8 ～ 9 月蔵書保存調査追加補足的調査	連絡部図書館協力課	資料保存研究会発足（世話人）
昭和 61 年	1986	6 月資料保存対策室室員、8 月 pH 調査開始	連絡部図書館協力課	
昭和 62 年	1987	BP の会、9 月米コロンビア大図書館学校留学	連絡部図書館協力課	資料保存分科会、『本を残す』刊行開始
昭和 63 年	1988	7 月帰国	図書館協力部国際協力課	
平成元年	1989	10 月収集部資料保存課長（～ 1992/3）	収集部資料保存課	6 月資料保存研究会会長
平成 2 年	1990	1 月保存協力プログラム開始、資料保存ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ開催	収集部資料保存課	4 月資料保存委員会初代委員長（～’91/5）
平成 3 年	1991		収集部資料保存課	
平成 4 年	1992	4 月逐次刊行物部雑誌課長	収集部資料保存課→逐次刊行物部雑誌課	
平成 5 年	1993		逐次刊行物部雑誌課	
平成 6 年	1994		逐次刊行物部雑誌課	
平成 7 年	1995		逐次刊行物部雑誌課	

国際的活動	各種団体活動	講師・講義　等	発表年	点数	著作物No.
			1969	1	1
			1970		
			1971	1	2
			1972		
			1973	1	3
			1974		
			1975		
			1976		
			1977		
			1978		
8 月 IFLA 年次大会（コペンハーゲン）			1979	5	4 ～ 8
			1980	8	9 ~16
6 ～ 7 月米図書館協会年次大会＆欧米図書館歴訪			1981	7	17~23
			1982	8	24~31
			1983	13	32~44
		「保存図書の酸性化対策に関する研究」研究分担者	1984	5	45~49
		「保存図書の酸性化対策に関する研究」研究分担者	1985	3	50~52
8 月 IFLA 東京大会で日本の資料保存について発表		3 月『保存図書の酸性化対策に関する研究』報告書刊行	1986	3	53~55
8 月 IFLA 大会参加、保存分科会常任委員、PAC 諮問委員、 9 月コロンビア大学図書館学校へ留学 (～ 88/7)			1987	4	56~59
8 月 IFLA 大会 (シドニー) 参加			1988	1	60
6 月インドネシア出張、9 月 IFLAPAC アジア地域センターに指定		9 月鶴見大学図書館学特別コース C 講師	1989	4	61~64
6 月東南アジア図書館人会議（ジャカルタ）			1990	4	65~68
5 月 IFLAPAC 地域センター長会議、保存研究に関する国際セミナー、12 月インドネシア国立図書館		「劣化紙の評価方法」研究分担者	1991	6	69~74
10 月日米大学図書館会議		「劣化紙の評価方法」研究分担者	1992	2	75~76
9 月世界の記憶国際諮問委員会（ワルシャワ）		「劣化紙の評価方法」研究分担者	1993		
		3 月『各種セルロース材料による劣化紙の補強方法の開発』報告書刊行	1994	2	77~78
		1 月『図書館と資料保存－酸性紙問題から 10 年』刊行	1995	4	79~82

		NDL（国立国会図書館）	NDL 在職時の所属	JLA（日本図書館協会）
平成 8 年	1996	4 月総務部企画課長	逐次刊行物部→総務部企画課	
平成 9 年	1997		総務部企画課	
平成 10 年	1998	4 月総務部副部長	総務部	12 月『図書館、文書館における災害対策』刊行
平成 11 年	1999	4 月逐次刊行物部長	総務部→逐次刊行物部	
平成 12 年	2000		逐次刊行物部	
平成 13 年	2001	4 月総務部関西館準備室長	逐次刊行物部→関西館準備室	
平成 14 年	2002	4 月関西館開庁　関西館長	関西館準備室→関西館	
平成 15 年	2003	4 月総務部長	関西館→総務部	
平成 16 年	2004	12 月副館長	総務部→副館長	
平成 17 年	2005		副館長	
平成 18 年	2006	2 月退職	副館長→顧問	10 月資料保存委員会内に保存管理チーム
平成 19 年	2007			3 月保存管理チームに代替保存班設置
平成 20 年	2008			
平成 21 年	2009			3 月『資料保存の調査と計画』刊行
平成 22 年	2010			3 月『資料保存のための代替』刊行
平成 23 年	2011			
平成 24 年	2012			
平成 25 年	2013			
平成 26 年	2014			
平成 27 年	2015			
平成 28 年	2016			
平成 29 年	2017			
平成 30 年	2018			
平成 31 年	2019			
令和 2 年	2020	12 月第 31 回 NDL 保存フォーラム ” 戦略的「保存容器」の使い方 " 講師		
令和 3 年	2021	1 月 29 日永眠		

国際的活動	各種団体活動	講師・講義　等	発表年	点数	著作物No.
7 月日米文化教育交流会議			1996	1	83
			1997		
			1998	1	84
			1999	2	85~86
1 月インド文化財保存機関協議会主催研修プログラム			2000	4	87~90
			2001	2	91~92
			2002	2	93~94
			2003		
			2004		
8 月オスロ大会、ＰＡＣセンター長会議			2005	1	95
6 月ベトナム国立図書館、8 月ソウル大会、11 月インドネシア国立図書館訪問	6 月専門図書館協議会顧問	7 月アーカイブズカレッジ受講	2006	1	96
11 月ベトナム国立図書館訪問			2007	3	97~99
		4 月学習院大学院資料保存科目講師	2008	8	100~107
4 月ベトナムで講演特別研修			2009	8	108~115
			2010	7	116~122
	5 月企業史料協議会副会長、東京文書救援隊設立、代表		2011	6	123~128
5 月パリで講演		7 月同志社大学図書館司書課程特別講座	2012	5	129~133
11 月ネパールで研修、講義、講演	日仏図書館情報学会長（～ 2019）、『企業アーカイブズの理論と実践』刊行		2013	3	134~136
	9 月 EAJRS 講演（ルーヴァン）、アドバイザー		2014	3	137~139
5 月ヤンゴン (ミャンマー) 日本図書館開発フォーラム			2015	4	140~143
	5 月「遺す」でなく「活かす」寄稿		2016	5	144~148
			2017	3	149~151
		11 月第 20 回図書館総合展セミナー講師	2018	2	152~153
	9 月 EAJRS 発表（ソフィア）	7 月専図協セミナー、11 月図書館総合展セミナー講師	2019		
		2 月専図協イブニングセミナー講師	2020	4	154~157
			2021	4	158~161
				161	

奈川県立公文書館が被災公文書のレスキューを実施するための指導者を募集しているが反応がないという。応募してみたらどうか」との話を受ける。応募の結果、筆者は同館レスキュー隊のリーダーとして雇用され、陸前高田市被災公文書レスキュー事業に従事することとなり、その事業終了後は同館の非常勤職員として資料保存を中心とする公文書館業務に就き、現在に至っている。

氏(師)を失った今、筆者は、安江氏から何を学んで、当館での日々の資料保存業務に臨んでいるのか。資料保存に関わるテーマを中心として安江氏が残した著作物は表２「安江明夫 著作物リスト」に見るとおり膨大な数に及ぶ(2)。

表２　安江明夫 著作物リスト

no.	タイトル	著者	発行年月日	資料種別	掲載誌（書）
1	政治家像の形成－ナショナルとローカルのばあい（岡村 忠夫との対談）	安江明夫（岡村忠夫との共著）	1969-09-00	記事・論文	都市問題 60(9) 1969-09-00 p.76 ～ 95
2	象徴天皇制と＜権威＞感覚－子どもの皇太子イメージ展開をめぐって	安江明夫	1971-08-00	記事・論文	社会科学ジャーナル = The Journal of social science / 国際基督教大学社会科学研究所 編（通号 10) 1971-08 p.181 ～ 221
3	パニッツィとブリティシュ・ミュジアム図書館：蔵書目録刊行中止とその背景をめぐって	安江明夫（熊田淳美との共著）	1973-05-00	NDL 刊行物	参考書誌研究 = Reference service and bibliography / 国立国会図書館利用者サービス部 編（通号 7) 1973-05 p.38 ～ 42
4	館長 IFLA 年次総会に出席	安江明夫	1979-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.4 CA006) 1979
5	全国的図書館システムの達成；英国の場合―Sir Fredrick S. Dainton の講演より	安江明夫	1979-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.4 CA021) 1979
6	ポンピドー・センター公共情報図書館（特集：フランスの公共図書館とポンピドー・センター公共図書館　－ルネ・フィエ氏講演記録－）	Rene Fillet 安江明夫（堂前幸子との共訳）	1979-00-00	記事・論文	日仏図書館研究　第 5 号（1979）p.4 ～ 14
7	ケベック・ナショナリズムと国立図書館	安江明夫	1979-02-00	NDL 刊行物	国立国会図書館月報 = National Diet Library monthly bulletin（通号 215) 1979-02 p.2 ～ 10
8	カナダの事情－モントリオール大学に勤務して	安江明夫	1979-03-00	記事・論文	現代の図書館 = Libraries today / 日本図書館協会 現代の図書館編集委員会 編 17(1) 1979-03 p.17 ～ 20
9	中国語のローマ字表記：北米図書館員の意見調査から	安江明夫	1980-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.6 CA038) 1980
10	全国書誌のマイクロフィッシュ版改訂――カナダ――	安江明夫	1980-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.7 CA042) 1980
11	ケネディ図書館の開館	安江明夫	1980-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.8 CA049) 1980
12	調査報告：武蔵野美術大学のポスター・コレクション	安江明夫	1980-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.10 CA069) 1980
13	中国語ローマ字表記ウエード方式で継続と決定―LC―	安江明夫	1980-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.12 CA082) 1980
14	全公図の「ナショナルプラン」策定作業第 3 年次へ	安江明夫	1980-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.13 CA085) 1980
15	15 世紀から 19 世紀フランスにおける印刷と社会（特集：アンリ＝ジャン・マルタン氏講演記録）	Henri-Jean Martin 安江明夫（堂前幸子との共訳）	1980-00-00	記事・論文	日仏図書館研究　第 6 号（1980）p.13 ～ 23
16	二つの感想－「日本図書コード」問題に寄せて	安江明夫	1980-10-00	記事・論文	図書館雑誌 = The Library journal / 日本図書館協会図書館雑誌編集委員会 編 74(10) 1980-10 p.561
17	カナダ国立図書館のライブラリー・ドキュメンテーション・センター	安江明夫	1981-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.18 CA116) 1981

no.	タイトル	著者	発行年月日	資料種別	掲載誌（書）
18	ICU での図書館利用調査	安江明夫	1981-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.19 CA121) 1981
19	日米友好基金の図書館援助	安江明夫	1981-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.21 CA132) 1981
20	仏国立図書館長、「保存」をめぐる国立図書館長会議を召集	安江明夫	1981-06-10	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.23 CA139) 1981-06-10
21	BPI で電話レファレンス・アンケート調査	安江明夫	1981-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.27 CA164) 1981
22	BLLD のサービススピードアップ	安江明夫	1981-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.28 CA169) 1981
23	「図書館の旅」をふりかえって（植木正張との対談）	安江明夫（植木正張との共著）	1981-10-00	記事・論文	国立国会図書館月報 = National Diet Library monthly bulletin（通号 247) 1981-10 p.2 ～ 9
24	文書レファレンスのレフェラル・プログラム―LC―	安江明夫	1982-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.33 CA195) 1982
25	大統領図書館をめぐる最近の話題―その１―	安江明夫	1982-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.34 CA200) 1982
26	大統領図書館をめぐる最近の話題―その２―	安江明夫	1982-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.35 CA207) 1982
27	華やかなデビュー―金沢工大図書館―	安江明夫	1982-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.36 CA213) 1982
28	ILL 依頼に 3 段階―カナダ国立図書館―	安江明夫	1982-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.40 CA230) 1982
29	マンフォード前 LC 館長を悼んで	安江明夫	1982-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.40 CA232) 1982
30	B.P.I. の電話レファレンス利用者調査	安江明夫	1982-00-00	記事・論文	日仏図書館研究　第 8 号（1981）p.46 ～ 55
31	図書館のアイデンティティ－知識と情報をめぐって	安江明夫	1982-11-00	NDL 刊行物	びぶろす：支部図書館・専門図書館連絡誌 = Biblos : monthly magazine for branch libraries, executive and judicial, and other special libraries / 国立国会図書館図書館協力部 編 33(11) 1982-11 p.252 ～ 262
32	連邦図書館ネットワークに向けて―米国―	安江明夫	1983-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.43 CA244) 1983
33	「本」の寿命と保存図書館の役割　－酸性紙問題によせて－	安江明夫	1983-04-10	雑誌	出版クラブだより / 日本出版クラブ　第 219 号 1983-04-10 p.1 ～ 3
34	非酸性紙の使用伸びる―米国・CLR のレポートから―	安江明夫	1983-04-10	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.45 CA253) 1983-04-10
35	RLG のマイクロ化 / 保存計画	安江明夫	1983-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.47 CA266) 1983
36	CLR の新しい活動方針	安江明夫	1983-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.49 CA275) 1983
37	LC の保存体制	安江明夫	1983-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.52 CA288) 1983
38	都立立川・逐刊センター 3 年の歩み	安江明夫	1983-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.53 CA293) 1983
39	「永く残る本」にむけて－ウィリアム・J・バローの研究開発 - 前 -	安江明夫	1983-07-00	Book02 に再録	科学技術文献サービス = Science and technology information service / 国立国会図書館専門資料部 編（通号 65) 1983-07 p.1 ～ 9
40	＜読みもの＞と＜調べもの＞（ブックストリート：図書館）	安江明夫	1983-08-00	記事・論文	出版ニュース = Japanese publications news and reviews : 出版総合誌（通号 1295) 1983-08 p.16
41	最後の拠りどころとしての図書館（ブックストリート：図書館）	安江明夫	1983-09-00	記事・論文	出版ニュース = Japanese publications news and reviews : 出版総合誌（通号 1298) 1983-09 p.16
42	図書館の空間と時間（ブックストリート：図書館）	安江明夫	1983-10-00	記事・論文	出版ニュース = Japanese publications news and reviews : 出版総合誌（通号 1301) 1983-10 p.16
39b	「永く残る本」にむけて－ウィリアム・J・バローの研究開発 - 後 -	安江明夫	1983-10-00	Book02 に再録	科学技術文献サービス = Science and technology information service / 国立国会図書館専門資料部 編（通号 66) 1983-10 p.15 ～ 30

no.	タイトル	著者	発行年月日	資料種別	掲載誌（書）
43	出版者と図書館（ブックストリート：図書館）	安江明夫	1983-11-00	記事・論文	出版ニュース = Japanese publications news and reviews : 出版総合誌（通号 1304) 1983-11 p.16
44	出版者と図書館（続）（ブックストリート：図書館）	安江明夫	1983-12-00	記事・論文	出版ニュース = Japanese publications news and reviews : 出版総合誌（通号 1307) 1983-12 p.16
参考	第 10 分科会　図書館資料の保存と利用とを、いかに調和させていくか　－酸性紙問題を中心として－	資料保存分科会〔安江明夫〕	1984-10-00	図書	全国図書館大会記録　昭和 59 年度 / 昭和 59 年度全国図書館大会実行委員会 編　1985-05　p.351 ～ 386（第 70 回全国図書館大会　大阪　1984-10-25 ～ 10-27 開催　資料保存分科会の企画運営）
45	全国保存センター設立に意欲―英国図書館―	安江明夫	1984-00-00	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.61 CA324) 1984
参考	紙の劣化と図書館資料の保存　－シンポジウムの記録〔資料含〕－	〔NDL〕酸性紙対策班〔安江明夫〕	1984-03-00	記事・論文	図書館研究シリーズ / 国立国会図書館関西館事業部図書館協力課 編（通号 24) 1984-03 p.125 ～ 232（国立国会図書館シンポジウム「紙の劣化と図書館資料の保存」1983 年 11 月 9 日開催の記録より）
46	図書館蔵書の保存調査－ 5 つの調査事例	安江明夫	1984-08-00	NDL 刊行物	科学技術文献サービス = Science and technology information service / 国立国会図書館専門資料部 編（通号 69) 1984-08 p.1 ～ 11
47	「書物の敵」新論	安江明夫	1984-10-00	記事・論文	図書 (422) 岩波書店 1984-10 p.1
48	本の保存の新しいパラダイム	安江明夫	1984-10-00	Book02 に再録	ゆずり葉（22）かなや工房　1984
49	図書館資料の保存と国立図書館の役割　ウォーレン・ハース（図書館振興財団理事長）による講演記録（国立国会図書館職員特別研修）	Warren Haas 安江 明夫（訳）	1984-11-00	NDL 刊行物	びぶろす : 支部図書館・専門図書館連絡誌 = Biblos : monthly magazine for branch libraries, executive and judicial, and other special libraries / 国立国会図書館図書館協力部 編 35(11) 1984-11 p.264 ～ 272,279
50	文献へのアクセス－フランスに於ける歴史と現状 ジャック・ケリギー（フランス共和国国立科学研究院科学技術情報センター図書館長）	Jacques Keriguy 安江 明夫（訳）	1985-05-00	記事・論文	大学図書館研究 = Journal of college and university libraries / 国公私立大学図書館協力委員会大学図書館研究編集委員会［編］（通号 26) 1985-05 p.1 ～ 7
51	納本法制定のための指針 Guideline for legal deposit legistlation	Jean Lunn 安江明夫（村上正志、山田正記との共訳）	1985-06-00	記事・論文	図書館研究シリーズ / 国立国会図書館関西館事業部図書館協力課 編（通号 25) 1985-06 p.1 ～ 49
52	脱酸技術の開発－「永く残る本」のために	安江明夫	1985-07-00	NDL 刊行物	科学技術文献サービス = Science and technology information service / 国立国会図書館専門資料部 編（通号 73) 1985-07 p.30 ～ 39
参考	第 1 部　本の保存をめぐる対話　－図書館へ、図書館から－（1985/10/31 宮城県民会館）	〔安江明夫（司会）〕	1985-10-31	図書	”保存”をめぐる対話　資料保存研究会 図書館フォーラム編
53	書籍用紙の酸性度と劣化（調査報告）	安江明夫	1986-04-00	記事・論文	図書館研究シリーズ / 国立国会図書館関西館事業部図書館協力課 編（通号 26) 1986-04 p.207 ～ 239
54	書籍用紙の劣化－酸と保存環境の影響 ＜特集＞情報媒体の変遷（紀元前から近未来へ）	安江明夫	1986-05-00	記事・論文	ドクメンテーション研究 : the journal of Information Science and Technology Association : 情報の科学と技術 36(5) 1986-05 p.211 ～ 220
55	＜変革の保存学＞序説 ― ウィリアム・バローと金谷博雄 ―	安江明夫	1986-05-00	Web 上に再録	ゆずり葉 別巻 1986-05 かなや工房（株式会社資料保存器材の Web コラム「スタッフのチカラ」に掲載　https://www.hozon.co.jp/report/post_9390）
Book01	保存図書の酸性化対策に関する研究	研究代表者 大江礼三郎　臼田誠人 安江明夫　増田勝彦　三浦定俊　岡山隆之	1987-03-00	図書，共同研究	昭和 60・61 年度科学研究費補助金総合研究 (A) 研究報告書
56	保存図書の分析	安江明夫（大江礼三郎、小山磨奈、大盛啓一、岡山隆之との共著）	1987-03-00	Book, 共同研究	Book01『保存図書の酸性化対策に関する研究』p.71 ～ 93
57	IFLA と資料保存	安江明夫	1987-07-00	記事・論文	図書館研究シリーズ / 国立国会図書館関西館事業部図書館協力課 編（通号 27) 1987-07 p.1 ～ 13
58	序文	資料保存研究会〔安江明夫〕	1987-08-00	図書，寄稿	『IFLA　資料保存の原則（シリーズ本を残す①）』ジャンヌ = マリーデュロー、デビッド・クレメンツ著　資料保存研究会　訳・編 日本図書館協会 ISBN 4-8204-8706-x　1987-08　p.3
59	改訂版「IFLA　資料保存の原則」の特質と意義	安江明夫	1987-08-00	図書，寄稿	『IFLA　資料保存の原則（シリーズ本を残す①）』ジャンヌ = マリーデュロー、デビッド・クレメンツ著　資料保存研究会　訳・編 日本図書館協会 ISBN 4-8204-8706-x　1987-08　p.43 ～ 62

no.	タイトル	著者	発行年月日	資料種別	掲載誌（書）
60	資料保存と国立図書館	安江明夫	1988-12-00	NDL 刊行物	国立国会図書館月報 = National Diet Library monthly bulletin（通号 333）1988-12 p.20 ～ 23
61	講演「資料保存のアメリカ　1959-1988」	安江明夫	1989-03-00	図書	全国図書館大会記録　昭和 63 年度 / 日本図書館協会 1989-03 p.194 ～ 199（第 74 回全国図書館大会　東京・多摩　1984-10-27 開催　資料保存分科会「図書館資料保存の現状と課題－国際的・業際的な視野から」における講演）
62	座談会「図書館における資料の保存」	〔安江明夫〕（糸賀雅児、木部徹、二宮嘉須彦との座談会）	1989-03-00	記事・論文	現代の図書館 / 日本図書館協会 27(1), p2-9, 1989-03
63	米国議会図書館における大量脱酸処理法の開発：米国議会技術評価局報告－翻訳－　Book Preservation Technology -a translation-	U.S. Congress、Office of Technology Assessment 安江明夫（高橋和雄、堂前幸子との共訳）	1989-03-00	NDL 刊行物	図書館研究シリーズ / 国立国会図書館関西館事業部図書館協力課 編（通号 28）1989-03
64	紙の強化法―期待される保存技術―	安江明夫	1989-12-20	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.124 CA640) 1989-12-20
65	資料保存のニュー・フロンティア－国立国会図書館から	安江明夫	1990-03-00	記事・論文	図書館雑誌 = The Library journal / 日本図書館協会図書館雑誌編集委員会 編 84(3) 1990-03 p.157 ～ 160
66	プロローグ	安江明夫	1990-07-00	Book03 に採録	ネットワーク資料保存 / 日本図書館協会資料保存委員会 編（26）1990-07 p.1 ～ 2
67	蔵書劣化の謎を追う－スロー・ファイヤー探偵団の冒険 - 前 -	安江明夫	1990-09-00	Book03 に採録	びぶろす：支部図書館・専門図書館連絡誌 = Biblos : monthly magazine for branch libraries, executive and judicial, and other special libraries / 国立国会図書館図書館協力部 編 41(9) 1990-09 p.214 ～ 219
67b	蔵書劣化の謎を追う－スロー・ファイヤー探偵団の冒険 - 後 -	安江明夫	1990-10-00	Book03 に採録	びぶろす：支部図書館・専門図書館連絡誌 = Biblos : monthly magazine for branch libraries, executive and judicial, and other special libraries / 国立国会図書館図書館協力部 編 41(10) 1990-10 p.230 ～ 236
68	蔵書保存の東南アジア－第 8 回 CONSAL 報告	安江明夫	1990-11-00	NDL 刊行物	国立国会図書館月報 = National Diet Library monthly bulletin（通号 356）1990-11 p.2 ～ 9
参考	中性紙図書、七割に　－新刊図書の p H 値測定結果報告（第 5 回）－	〔NDL〕資料保存対策室〔安江明夫〕	1990-12-00	NDL 刊行物	国立国会図書館月報 = National Diet Library monthly bulletin（通号 357）1990-12 p.16 ～ 17
69	「保存協力プログラム」の概要	安江明夫	1991-03-25	図書	全国図書館大会記録　平成 2 年度 / 全国図書館大会実行委員会 編　1991-03 p.175 ～ 176（第 76 回全国図書館大会　静岡　1990-10-25 開催　資料保存分科会「誰にでもできる資料保存のための調査と計画」における報告）
70	サヨウナラ , マタアイマショウ－ 3 か月の保存研修を終えて　モハメッド・ラザリ・ビン・モハメッド・ザイン	Mohamed Razali bin Mohamed Zain 安江 明夫（訳）	1991-04-00	NDL 刊行物	国立国会図書館月報 = National Diet Library monthly bulletin（通号 361）1991-04 p.18 ～ 20
71	オーストラリア国立図書館の資料保存活動－同館保存部長ジャン・ライアル氏に聞く	安江明夫	1991-05-00	NDL 刊行物	国立国会図書館月報 = National Diet Library monthly bulletin（通号 362）1991-05 p.2 ～ 9
72	pH survey of Current Publications in Japan	Akio Yasue	1991-07-00	記事・論文	” Conservation Administration News” No.50 p.1 ～ 2, 29（1991-07）
73	資料保存の世界的ネットワークに向けて－ 2 つの国際会議報告	安江明夫	1991-09-00	NDL 刊行物	国立国会図書館月報 = National Diet Library monthly bulletin（通号 366）1991-09 p.2 ～ 9
74	神話から科学へ－大量脱酸技術の再検討	安江明夫	1991-11-00	NDL 刊行物	びぶろす：支部図書館・専門図書館連絡誌 = Biblos : monthly magazine for branch libraries, executive and judicial, and other special libraries / 国立国会図書館図書館協力部 編 42(11) 1991-11 p.268 ～ 275
75	資料保存のための基準づくり－ ISO/TC46/SC10 の活動	安江明夫	1992-09-00	記事・論文	現代の図書館 = Libraries today / 日本図書館協会現代の図書館編集委員会 編 30(3) 1992-09 p.211 ～ 214
76	新しい資料保存の理解	安江明夫	1992-11-00	図書	平成 3(1991) 年度　全国公共図書館研究集会報告書／日本図書館協会公共図書館部会 1992-11　p.1 ～ 4

no.	タイトル	著者	発行年月日	資料種別	掲載誌（書）
77	「世界の記憶」：ユネスコの新規プログラム	安江明夫	1994-01-20	NDL 刊行物	カレントアウェアネス / 国立国会図書館 (No.173 CA918) 1994-1-20
Book02	各種セルロース材料による劣化紙の補強方法の開発	研究代表者 大江礼三郎	1994-03-00	図書，共同研究	科学研究費補助金 (試験研究 (B)(1)) 研究成果報告書：平成 3・4・5 年度　課題番号 03556023
78	劣化紙の評価方法	安江明夫（大江礼三郎、岡山隆之、永田耕司との共著）	1994-03-00	図書，共同研究	Book02『各種セルロース材料による劣化紙の補強方法の開発』p.51 ～ 93
Book03	図書館と資料保存：酸性紙問題からの 10 年の歩み（雄松堂ライブラリー・リサーチ・シリーズ；1）	安江明夫（木部徹，原田淳夫との共編著）	1995-01-27	図書，共編著	雄松堂出版、ISBN 4-8419-0149-3　1995-01-27
79	はじめに　－『図書館と資料保存』の編集に当たって－	安江明夫（木部徹、原田敦夫との共著）	1995-01-27	図書，寄稿	Book03『図書館と資料保存』p.1 ～ 2
80	総論　酸性紙問題から資料保存へ	安江明夫	1995-01-27	図書，寄稿	Book03『図書館と資料保存』p.3 ～ 16
81	酸性紙問題からの 10 年　資料保存へ深まる理解　使命自覚の図書館　”利用者本位”へ改善も	安江明夫	1995-02-21	新聞、寄稿	読売新聞　夕刊　1995 年 2 月 21 日付
82	基調講演「資料保存の 10 年　－これまでとこれから－」〔資料保存小史 (日本) を含む〕	安江明夫	1995-03-00	図書，寄稿	資料保存ワークショップ記録集：資料はいつまで利用できるのか 日本図書館協会資料保存委員会 編 日本図書館協会，1995-03　p .9 ～ 43
83	拡がる資料保存－保存分科会を中心に	安江明夫	1996-12-00	NDL 刊行物	びぶろす：支部図書館・専門図書館連絡誌 = Biblos : monthly magazine for branch libraries, executive and judicial, and other special libraries / 国立国会図書館図書館協力部 編 47(12) 1996-12 p.284 ～ 288
Book04	図書館、文書館における災害対策（シリーズ本を残す⑦）	サリー・ブキャナン 著、安江明夫（監修）、小林昌樹，三輪由美子，永村恭代 訳	1998-02-20	図書，監修	日本図書館協会、ISBN 4-8204-9824-X 1998-2-20
84	邦訳にあたって	安江明夫	1998-02-20	図書，寄稿	Book04『図書館，文書館における災害対策』p.3 ～ 6
85	メデイア変換の why と how	安江明夫	1999-03-00	図書	全国図書館大会記録　平成 10 年度 / 全国図書館大会実行委員会 編　1999-03 p.214 ～ 215（第 84 回全国図書館大会 秋田　1998-10-22 開催　資料保存分科会「資料保存のためのメディア変換－デジタル時代の資料保存戦略」における講演）
86	＜座談会＞国立図書館の役割と未来	〔安江明夫〕（松原秀一、三浦逸雄、細野公男との座談会）	1999-06-01	記事・論文	三田評論 1014 1999-06-01 p.6-19
87	メディア時評 デジタル出版物の寿命	安江明夫	2000-03-00	記事・論文	文学 1(2) 2000-03 p.148 ～ 150
88	資料保存の how と why 再論	安江明夫	2000-06-16	Web contents	資料保存協議会第 2 回セミナー「資料保存を仕切り直す ― なぜ図書館・公文書館全体の取り組みにならないのか」2000 年 6 月 16 日（株式会社資料保存器材の Web コラム「スタッフのチカラ」に掲載　https://www.hozon.co.jp/report/post_9377?doing_wp_cron=1632788392.7969050407409667968750）
89	Conservation and Preservation Today(4) インド管見－保存研修に参加して	安江明夫	2000-09-00	記事・論文	ネットワーク資料保存 / 日本図書館協会資料保存委員会 編 (61) 2000-09 p.1 ～ 3
90	文化協力のススメ　－アジアの蔵書を保存するために－	安江明夫	2000-10-00	図書	アジアをつなぐネットワーク：保存協力のこれから：第 10 回資料保存シンポジウム講演集／国立国会図書館　編　2000-10　p.25 ～ 43（国立国会図書館　1999-11-08 開催）
91	資料保存の Why と What	安江明夫	2001-02-00	図書	ひびや：東京都立中央図書館館報 (150) 2001-02 p.59-60〔東京都立中央図書館資料保存委員会主催資料保存講演会（都内公立図書館職員等対象）「資料を保存するとは？―「利用のための資料保存」入門」（2000-10-11 開催）における基調講演〕
92	Keep going!!　特集：資料保存の 10 年	安江明夫	2001-09-00	記事・論文	ネットワーク資料保存 / 日本図書館協会資料保存委員会 編 (65) 2001-09 p.1 ～ 3

no.	タイトル	著者	発行年月日	資料種別	掲載誌（書）
93	インタビュー 国民にとってより身近な図書館へ－安江明夫 (国立国会図書館関西館長)	安江明夫	2002-10-00	記事・論文	経済人 56(10) (通号 661) 2002-10 p.6 ～ 8
94	離陸した国立国会図書館関西館	安江明夫	2002-11-00	NDL 刊行物	国立国会図書館月報 = National Diet Library monthly bulletin (500) 2002-11 p.8 ～ 11
95	国立図書館長会議、「世界図書館」会合、国立図書館分科会 デジタル環境への国立図書館の挑戦	安江明夫	2005-12-00	NDL 刊行物	国立国会図書館月報 = National Diet Library monthly bulletin (537) 2005-12 p.4 ～ 7
96	＜投稿＞　ビネガー・シンドローム問題再考－マイクロフィルムの保存のために	安江明夫	2006-12-00	記事・論文	現代の図書館 = Libraries today / 日本図書館協会現代の図書館編集委員会 編 44(4) (通号 180)2006-12 p.240 ～ 251
97	マイクロフィルムの保存計画－ビネガー・シンドローム対策を中心に	安江明夫	2007-00-00	記事・論文	専門図書館 = Bulletin of the Japan Special Libraries Association / 機関誌委員会 編 (223) 2007 p.26 ～ 34
98	図書館における保存管理の役割－《第 2 回資料保存委員会セミナー》の記録	安江明夫	2007-01-00	記事・論文	ネットワーク資料保存 / 日本図書館協会資料保存委員会 編 (82) 2007-01 p.4 ～ 6
99	地域研究と資料保存 : 保存管理者の視点 (＜企画＞国際シンポジウム : アジア・アフリカ史資料学の現在と地域文化研究)	安江明夫	2007-03-00	記事・論文	文部科学省 21 世紀 COE プログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」総括班 編 (9) 2007-03 p.11 ～ 22
参考	基調講演「資料保存の再設計 - 図書館・アーカイブがその使命を果たすために」	安江明夫	2007-10-04	Web contents	JHK/ 日本図書館協会共催 資料保存シンポジウム「プリザベーション・マネジメント - 資料保存の新しい地平 -」2007-10-04 開催での講演内容を文書管理通信（https://www.bunkan.jp/）編集室がまとめたもの
100	現代に生きる図書修復の思想－「IFLA 原則 (1979)」を巡る考察	安江明夫	2008-03-25	記事・論文	文化財保存修復学会誌 第 53 号 2008-03-25 p.54 ～ 66
101	マイクロ資料の劣化 : 原因と対処	安江明夫	2008-03-31	記事・論文	『アジア古籍保全講演会記録集』　東洋文化研究所 2008-03-31
102	第 9 章　資料保存	安江明夫（分担執筆）	2008-02-22	図書 , 寄稿	『新訂　図書館資料論（新現代図書館学講座 8)』小黒浩司編　東京書籍　ISBN 978-4-487-71494-0 2008-02-22 p.157 ～ 172
103	＜窓＞　図書館の見方	安江明夫	2008-03-00	記事・論文	図書館雑誌 = The Library journal / 日本図書館協会図書館雑誌編集委員会 編 102(3) (通号 1012) 2008-03 p.140
104	＜資料の保存＞　大量脱酸技術の展望　－マネジメントの視点から－	安江明夫	2008-05-00	記事・論文	アーカイブズ / 国立公文書館 編 (32) 2008-05 p.29 ～ 36
105	＜窓＞　グーグルと図書館	安江明夫	2008-07-00	記事・論文	図書館雑誌 = The Library journal / 日本図書館協会図書館雑誌編集委員会 編 102(7) (通号 1016) 2008-07 p.428
106	海外日本研究者の画像利用－北米日本研究資料調整協議会 (NCC) シンポジウムから	安江明夫（バゼル 山本 登紀子 坂口 英子と共著）	2008-07-00	記事・論文	出版ニュース = Japanese publications news and reviews : 出版総合誌 (通号 2147) 2008-07-00 p.6 ～ 12
107	＜窓＞　フランクリンの発明	安江明夫	2008-11-00	記事・論文	図書館雑誌 = The Library journal / 日本図書館協会図書館雑誌編集委員会 編 102(11) (通号 1020) 2008-11 p.752
108	《事例報告 1》「代替保存：過去・現在・未来」	安江明夫	2009-02-00	図書	全国図書館大会記録　平成 20 年度 / 平成 20 年度第 94 回全国図書館大会兵庫大会組織委員会事務局 編 2009-02 p.xx (第 94 回全国図書館大会　兵庫　2008-09-19 開催　資料保存分科会「マイクロ化とデジタル化－『利用のための資料保存』を支えるパートナー－」における報告)
109	《ワークショップ 2》「マイクロフィルムの健康診断 － A-D ストリップを用いて－」	安江明夫	2009-02-00	記事・論文	同上
Book05	資料保存の調査と計画	日本図書館協会資料保存委員会編集企画、安江明夫（監修）	2009-03-05	図書 , 監修	日本図書館協会、ISBN 978-4-8204-0825-3　2009-03-05

no.	タイトル	著者	発行年月日	資料種別	掲載誌（書）
110	序	安江明夫	2009-03-05	図書，寄稿	Book05『資料保存の調査と計画』p.3 ～ 7
111	マイクロ資料の保存状態調査	安江明夫	2009-03-05	図書，寄稿	Book05『資料保存の調査と計画』p.89 ～ 105
112	文献案内	安江明夫（矢野正隆との共著）	2009-03-05	図書，寄稿	Book05『資料保存の調査と計画』p.130 ～ 137
113	公共図書館と協力保存：利用を継続して保証するために：法人化第一回総会記念講演記録（多摩デポブックレット；1）	安江明夫	2009-05-31	図書，単著	共同保存図書館・多摩　PB けやき出版、ISBN 978-4-87751-388-7 20090000
114	海外日本研究者の画像利用事情：東京シンポジウムの記録	安江明夫（小出いずみとの共編）	2009-08-00	図書，共編	2008 年 6 月 23 日に国際文化会館で開催されたシンポジウムの記録：北米日本研究資料調整協議会
115	第 11 回図書館サポートフォーラム賞表彰式での祝辞	安江明夫	2009-09-30	Web contents	第 11 回図書館サポートフォーラム賞（図書館サポートフォーラム＿事務局：日外アソシエーツ）を受賞した木部徹氏（株式会社資料保存器材）の業績を紹介する内容　2009 年 9 月 30 日（株式会社資料保存器材の Web コラム「スタッフのチカラ」に掲載　https://www.hozon.co.jp/report/post_8509）
116	保存計画ツールの発展－ UC バークレー図書館からの報告	Barclay Ogden 安江明夫（訳）	2010-00-00	記事・論文	専門図書館 = Bulletin of the Japan Special Libraries Association / 機関誌委員会 編 (241) 2010 p.2 ～ 11
117	蔵書を考え直す視点	安江明夫	2010-00-00	記事・論文	専門図書館 = Bulletin of the Japan Special Libraries Association / 機関誌委員会 編 (242) 2010 p.35 ～ 41
118	ヤシの葉写本研究ノート	安江明夫	2010-00-00	記事・論文	学習院大学文学部研究年報 = The annual collection of Essays and Studies Faculty of Letters / 学習院大学文学部 編 (57) 2010 p.105 ～ 140
Book06	資料保存のための代替	日本図書館協会資料保存委員会編集企画、安江明夫（監修）	2010-03-15	図書，監修	日本図書館協会　ISBN 978-4-8204-0922-9　2010-03-15
119	序	安江明夫	2010-03-15	図書，寄稿	Book05『資料保存のための代替』p.3 ～ 4
120	代替保存　－これまでとこれから－	安江明夫	2010-03-15	図書，寄稿	Book05『資料保存のための代替』p.7 ～ 26
121	画像技術と図書館・アーカイブズの資料保存	安江明夫	2010-02-00	記事・論文	日本写真学会誌 = Journal of the Society of Photography and Imaging of Japan 73(1) 2010-02 p.3 ～ 5
122	文化資源機関の保存マネジメント	安江明夫	2010-10-00	図書，寄稿	図書館・博物館・文書館の連携（シリーズ　図書館情報学のフロンティア　No.10）日本図書館情報学会研究委員会 編 / 勉誠出版　ISBN 978-4-585-00279-6　2010-10 p .57 ～ 71
123	ヤシの葉から紙へ：ネパール写本研究ノート	安江明夫	2011-00-00	記事・論文	学習院大学文学部研究年報 = The annual collection of Essays and Studies Faculty of Letters / 学習院大学文学部 編 (58) 2011 p.87 ～ 114
124	講演録 書物の文化への特異な貢献：パーマネント・ペーパーの創始者たち	安江明夫	2011-00-00	記事・論文	日仏図書館情報研究 (37) 2011 p.1 ～ 13（2011 年 5 月 28 日開催の筆者発表に加筆）
125	書籍用紙を変革したコンサバター	安江明夫	2011-02-00	記事・論文	百万塔 / 紙の博物館 [編] (138) 2011-02 p.46 ～ 56
126	アーカイブズ保存の考え方・進め方	安江明夫	2011-02-10	Web contents	2011 年 2 月 10 日に開催された全国歴史資料保存利用機関連絡協議会第 109 回例会での報告のまとめ（https://www.hozon.co.jp/cms/wp-content/uploads/yasue_preservation_of_archives.pdf）
127	デジタル・スキャナーの活用－マイクロフィルムの利便性向上策	安江明夫	2011-03-00	記事・論文	ネットワーク資料保存 / 日本図書館協会資料保存委員会 編 (97) 2011-03 p.1 ～ 3

no.	タイトル	著者	発行年月日	資料種別	掲載誌（書）
128	「東京文書救援隊」発足のご挨拶	安江明夫	2011-06-01	Web contents	東京文書救援隊代表として Web で発表した挨拶文（2011 年 6 月 1 日）（https://toubunq.blogspot.com/search/label/%E3%81%8A%E7%9F%A5%E3%82%89%E3%81%9B）
129	講演　資料保存論	安江明夫	2012-00-00	記事・論文	同志社大学図書館学年報 / 同志社大学図書館司書課程 編 (38) (通号 別冊) 2012 p.92 ～ 102（「新・資料保存論」として同志社大学図書館司書課程 23 号 2013-01-31 発行に再録）
130	サイズ : 言葉の歴史散歩	安江明夫	2012-02-00	記事・論文	百万塔 / 紙の博物館 [編] (141) 2012-02 p.53 ～ 62
131	蔵書の防災計画 : 図書館の “must”	安江明夫	2012-03-00	記事・論文	大学図書館研究 = Journal of college and university libraries / 国公私立大学図書館協力委員会大学図書館研究編集委員会 [編] (94) 2012-03 p.32 ～ 38
132	会社の歴史ー化学企業にとっての付加価値ーアンドレア・ホーマイヤー	Andreas Homeier 安江明夫（訳）	2012-03-26	図書 , 寄稿	『世界のビジネス・アーカイブズ : 企業価値の源泉』渋沢栄一記念財団実業史研究情報センター 編 / 日外アソシエーツ , ISBN 978-4-8169-2353-1, 2012-03
133	資料保存の考え方と取り組み方	安江明夫	2012-10-31	記事・論文	別冊 Muse 2012 －企業と史料　史料の収集、保管、そして利活用の現状と課題　／　帝国データバンク史料館　2012-10-31　p.36 ～ 42
134	ペリオ講義ノート「中国印刷術の始原」と日本の東洋学	安江明夫	2013-00-00	記事・論文	日仏図書館情報研究 (38) 2013 p.11 ～ 21
135	折本の起源考	安江明夫	2013-06-00	記事・論文	汲古 / 古典研究会 編 (63) 2013-06 p.25 ～ 32
136	冊子の誕生 : 東洋編	安江明夫	2013-12-00	記事・論文	汲古 / 古典研究会 編 (64) 2013-12 p.47 ～ 54
137	袋綴じ装の発明と発展	安江明夫	2014-06-00	記事・論文	汲古 / 古典研究会 編 (65) 2014-06 p.51 ～ 57
138	アーカイバル・ボードの開発と普及	安江明夫	2014-10-00	記事・論文	百万塔 / 紙の博物館 [編] (149) 2014-10 p.16 ～ 27
139	線装はいつ発現したか	安江明夫	2014-12-00	記事・論文	汲古 / 古典研究会 編 (66) 2014-12 p.47 ～ 53
140	敦煌文書保存の一世紀	安江明夫	2015-00-00	記事・論文	学習院大学文学部研究年報 = The annual collection of Essays and Studies Faculty of Letters / 学習院大学文学部 編 (62) 2015 p.289 ～ 317
141	ニコラ・ジャンソン : 最初のフランス人印刷職人の肖像	安江明夫	2015-00-00	記事・論文	日仏図書館情報研究 (40) 2015 p.41 ～ 53
142	2015 年（第 10 回）DAY 賞受賞者メッセージ	安江明夫	2015-00-00	Web contents	国際基督教大学同窓会　2015 年（第 10 回）DAY 賞受賞（https://www.icualumni.com/wp/wp-content/uploads/2019/06/web_DAY2015-1.pdf）
143	在外和古書の保存など : EAJRS@ ルーヴァン報告	安江明夫	2015-02-00	記事・論文	ネットワーク資料保存 / 日本図書館協会資料保存委員会 編 (109) 2015-02 p.1 ～ 4
144	近現代紙資料の保存－図書館・アーカイブズの視点－	安江明夫	2016-03-31	Web contents	保存修復科学センター近代文化遺産研究室編集『未来につなぐ人類の技⑥　洋紙の保存と修復』独立行政法人　国立文化財機構　東京文化財研究所　2016-03-31 _平成 26（2014）年 11 月 21 日に開催された「第 28 回　近代の文化遺産の保存修復に関する研究会　洋紙の保存と修復」での発表内容をまとめたもの
145	「遺す」でなく「活かす」: 企業アーカイブズの本領	安江明夫	2016-05-00	記事・論文	企業と史料 / 企業史料協議会 編 11 号 2016-05 p.16 ～ 24（12 号　2017-05 p .6 ～ 15 に再録）
146	浅草文庫旧蔵「蘭書」の行方 : 記録・史料による追跡	安江明夫	2016-06-00	記事・論文	アーカイブズ学研究 / 日本アーカイブズ学会 編 (24) 2016-06 p.30 ～ 43

no.	タイトル	著者	発行年月日	資料種別	掲載誌（書）
147	EAJRS 在欧和古書保存調査報告	安江明夫	2016-00-00	Web contents	EAJRS 日本資料専門家欧州協会 (https://www.eajrs.net/files/kosho/conservation_wg_report_2015-2016_jpn.pdf)
148	在欧和古書保存プロジェクトの進展	安江明夫	2016-12-00	記事・論文	ネットワーク資料保存 / 日本図書館協会資料保存委員会 編 (115) 2016-12 p.1 ～ 4
149	保存「記録」はどうなっているか？	安江明夫	2017-07-00	記事・論文	ネットワーク資料保存 / 日本図書館協会資料保存委員会 編 (116) 2017-07 p.1 ～ 4
150	毎日のうつわ : 安江かえでの仕事	安江かえで（うつわ・文）、安江明夫（編）	2017-03-00	図書	安江明夫（自費出版）
151	保存自己査定（日本特別コレクション対象）≪ガイド≫（第 1 版）	〔安江明夫〕	2017-08-00	Web contents	EAJRS 日本資料専門家欧州協会 和古書保存ワーキンググループ (https://www.eajrs.net/files/kosho/preservation_guide_jpn.pdf)
152	「蘭書」発見記補遺	安江明夫	2018-03-00	NDL 刊行物	参考書誌研究 = Reference service and bibliography / 国立国会図書館利用者サービス部 編 (79) 2018-03 p. 図巻頭 10p,91 ～ 115, 巻末 1p
153	資料保存の why と what : 企業ライブラリー篇	安江明夫	2018-05-00	記事・論文	専門図書館 = Bulletin of the Japan Special Libraries Association / 機関誌委員会 編 (289) 2018-05 p.39 ～ 44
154	『解体新書』扉絵を巡る書誌的考察	安江明夫	2020-00-00	記事・論文	洋学 = Annals of the Society for the History of Western Learning in Japan : 洋学史学会研究年報 /「洋学」編集委員会 編 , 岩田書院 (発売) 27 号 ,2020, p.63 ～ 79
155	保存管理自己点検表　第一版（2020.6）	〔安江明夫〕	2020-06-00	Web contents	専門図書館協議会研修委員会（EAJRS 和古書保存 WG 作成「保存自己査定」を参考にしたもの　https://jsla.or.jp/jsla/wp-content/uploads/sentokyo_hozontenken202009.pdf）
155b	「保存管理自己点検表」使用の手引き　第一版（2020.6）	〔安江明夫〕	2020-06-00	Web contents	専門図書館協議会研修委員会（https://jsla.or.jp/jsla/wp-content/uploads/sentokyo_hozontenken-tebiki202009.pdf）
156	近代容器の起源と「防ぐ」保存の発展	安江明夫	2020-12-00	配布資料	第 31 回保存フォーラム（国立国会図書館）「戦略的「保存容器」の使い方ーさまざまなカタチで資料を護る一」での発表に際しての配布物 (動画配信は 2020-12-16 ～ 2021-01-15)
157	PARBICA 善き統治のためのレコードキーピング・ツールキット　ガイドライン 20：災害防備計画をつくる」日本語版	安江明夫（監修）	2020-12-16	Web contents	国際公文書館会議太平洋支部（PARBICA）が作成したガイドラインを国立公文書館が日本語翻訳し Web 公開したもの（http://www.archives.go.jp/about/report/pdf/PARBICA_guideline_20_JP.pdf）
158	PARBICA 善き統治のためのレコードキーピング・ツールキット　ガイドライン 21：災害対応計画をつくる」日本語版	安江明夫（監修）	2021-02-17	Web contents	国際公文書館会議太平洋支部（PARBICA）が作成したガイドラインを国立公文書館が日本語翻訳し Web 公開したもの（http://www.archives.go.jp/about/report/pdf/PARBICA_guideline_21_JP.pdf）
159	日本文化史上のプランタン－ 16 世紀フランス人印刷業者の偉大	安江明夫	2021-02-22	図書 , 寄稿	学会創立 50 周年記念出版『書物史研究の日仏交流』/ 日仏図書館情報学会 編 ISBN:978-4883673483　樹林房 2021-02
160	ドドネウス『草木誌』の書誌学的研究 : 徳川吉宗 / 野呂元丈篇	安江明夫	2021-04-10	記事・論文	洋学 = Annals of the Society for the History of Western Learning in Japan : 洋学史学会研究年報 (28), 137-154, 2021
161	平賀源内遺本の発見 : 杏雨書屋所蔵ドドネウス『草木誌』調査から	安江明夫	2021-06-16	記事・論文	杏雨 / 武田科学振興財団・杏雨書屋 編 (24):2021 p.125 ～ 143

安江氏が説いた資料保存論の特色は何であったのか。私が当館で取り組んだ「資料保存」の理論的ベースや実践の手法の多くは安江氏の教えの中から得られた。現下の予測不能の時代にあって、アーカイブズ機関における資料保存にいかに取り組むべきか。目前の課題は旧来からのものもあれば、かつて想定したことのないものも出てく

る。それらに対処する道筋を得るべく、氏が説いた資料保存論の特色を改めて探り直してみたい。筆者がリアルタイムに知る安江氏は晩年の10年間に過ぎず、NDL 奉職期については著作物等によるほかないが、以下私にできる範囲でそれを明らかにすることで氏への追悼としたい。

1　安江明夫氏の資料保存論

安江明夫氏が説いた(著作物として残した)資料保存論のテーマとしては主に以下にまとめることができよう。

(1) 酸性紙問題(資料の状態調査、脱酸性化技術等を含む)

(2) 資料保存概論(資料保存の定義、目的を含む)

(3)「代替」の方策(マイクロフィルム化、デジタル化等)

(4) 上記以外の保存プログラム各論(保存ニーズ調査、資料防災等)

氏は、前述のとおり NDL 在職や大学院での資料保存科目の講師を務めたことで、資料保存に関する豊富で広範な知識と経験を持ち合わせていたが、著作や講演等の発表の機会に選ぶテーマは「資料保存」に関わるあらゆること、と言うよりは、氏が考える「資料保存」の勘所に関わるものであり、それを繰り返し説いたことがわかる。

なお、安江氏が取り組んだ著作のテーマは「資料保存」にとどまらず、特に晩年には、書誌学的論考や舶載蘭書研究に関する論考が少なくない。これらも興味深く、価値ある研究成果であるが、筆者にそれら分野の知識がないこともあり、本稿では触れない。

1．1　学習院大学院講義科目にみる「資料保存論」の内容

先ずは、安江氏の資料保存論の全体像を示すものとして、学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻において氏が講義した資料保存科目のシラバス（講義の目的、内容、進め方を示した計画書）を取り上げる[(3)]。さらに、その特徴を捉えるために、他の資料保存研究者の講義内容と比較してみる。

この資料保存科目は正式には「アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅲ　記録史料保存論」という。通年講義で25 ～ 30コマ(教室での講義以外に、学内での紙資料補修実習、学外の修復工房やアーカイブズ機関の見学を含む。年度によってコマの合計数に

変動がある。)、４単位が与えられる科目であった。

2015年度のシラバスには、講義の目的として下記が掲げられている。

アーカイブズは収集した紙資料、デジタル記録等のコレクション(所蔵資料)を維持・管理し、その継続的な利用を保証することを任務とする。これらアーカイブズが基盤とする様々な記録史料のコンサベーション(維持・管理、補修等の手当て)とプリザベーション(保存マネジメント)について、その理論と実践を学ぶ。

同じシラバスに記された講義内容(８つの分類項目)と講義の目標は以下の通り。

〔 講義内容(の分類項目)〕

①記録史料保存の考え方、

②種々の記録史料の特性とその利用阻害要因、

③保存のための予防と治療、

④資料レベルの保存ニーズ査定と処置の選択、

⑤コレクション・レベルの保存ニーズ査定、

⑥保存プログラムの策定、

⑦災害と防災

⑧国内外の関連文献・情報源、専門機関、関係学協会等の案内、を柱とする(4)。

〔 講義の目標 〕

受講生がアーキビストに必要な記録史料保存の基本的知識と実践的素養を身につけることを目標としている。

シラバスには、さらにコマごとの講義内容が示されている（表３参照)。

表３　2015 年度の講義内容と分類項目別のコマ数

通し No.	講義内容	該当する分類項目番号
1	記録史料の保存（1）：コンサベーション	①
2	記録史料の保存（2）：プリザベーション	①
3	記録史料の素材：支持体・担体及びデジタルデータ	②
4	記録史料の利用阻害要因：劣化損傷、機器・システムの旧式化、災害等	②
5	支持体としての紙：歴史、製法、種類、保存性	②
6	紙資料劣化の外的要因（1）：化学的要因と環境管理	②，③
7	紙資料劣化の外的要因(2):生物的要因と IPM(総合的有害生物管理)	②，③
8	紙資料劣化の外的要因（3）：物理的要因（取扱い等）とその対策	②，③
9	紙資料劣化の内的要因（1）：酸・リグニンとその対策	②，③
10	紙資料劣化の内的要因（2）：酸・リグニンとその対策（続）	②，③
11	紙資料劣化の内的要因（3）：担体の劣化とその対策	②，③
12	紙資料の保存（1）：予防（容器収納等）	③
13	紙資料の保存（2）：治療（補修等）	③
14	紙資料の保存（3）：複製（マイクロ化とデジタル化）	③
15	1 学期まとめ	
16	非紙資料の保存（1）：マイクロフィルムの劣化原因とその対策	②，③
17	非紙資料の保存（2）：デジタル情報長期保存の課題	②，③
18	保存ニーズ査定（資料レベル）と処置方法の選択	④
19	保存ニーズ査定（コレクション・レベル）（1）：資料の状態調査	⑤
20	保存ニーズ査定（コレクション・レベル）（2）：環境調査と施設点検	⑤
21	資料保存工房見学	⑧
22	保存プログラムの策定（1）：事例紹介／参照モデル	⑥
23	保存プログラムの策定（2）：リスク管理／計画プロセス	⑥
24	アーカイブズ機関見学	⑧
25	災害と防災（1）：災害の種類／防備と対処	⑦
26	災害と防災（2）：防災計画の立案	⑦
27	レポート発表（1）	⑧
28	レポート発表（2）	⑧
29	学年まとめ	⑧
30	予備日	
番外	アーカイブズ保存ワークショップ－傷んだ文書を補修する／保存容器をつくる	⑧

該当する通し No.	講義内容の項目分類	コマ数
1，2	① 記録史料保存の考え方	2.0
3 -11,16,17	② 種々の記録史料の特性とその利用阻害要因	7.0
6 -14,16,17	③ 保存のための予防と治療	7.0
18	④ 資料レベルの保存ニーズ査定と処置の選択	1.0
19,20	⑤ コレクション・レベルの保存ニーズ査定	2.0
22,23	⑥ 保存プログラムの策定	2.0
25,26	⑦ 災害と防災	2.0
15,21,24, 27-29, 番外	⑧ 国内外の関連文献・情報源、専門機関、関係学協会等の案内	7.0

上記表３の下部には、氏が分類した８項目で各々にどれだけコマ数を割いているかを示してある。

その項目分類別のコマ数が講義を開始した2008年度から終了した2015年度までにどのように推移したかを示したのが表４である。

表４　2008年～ 2015年度の項目分類別コマ数の推移

平成 20（2008）年度	2008	平成 21（2009）年度	2009	前年比	2010	2011	平成 24（2012）年度以降	2012	2013	2014	2015
講義内容	コマ数	講義内容	コマ数		コマ数	コマ数	講義内容	コマ数	コマ数	コマ数	コマ数
① 記録史料保存の考え方の発展	4.0	① 記録史料保存の歴史的発展	2.0	-2.0	2.0	2.0	① 記録史料保存の考え方	2.0	2.0	2.0	2.0
② 種々の記録史料の特性と劣化要因・利用阻害要因	4.5	② 種々の記録史料の特性とそれらの劣化要因	7.5	3.0	7.0	6.5	② 種々の記録史料の特性とその利用阻害要因	7.0	7.0	7.0	7.0
③ 記録資料保存のための予防と治療（保存対策）	6.5	③ 記録資料保存のための予防と治療（保存対策）	7.5	1.0	7.0	6.5	③ 保存のための予防と治療	7.0	7.0	7.0	7.0
④ 蔵書調査・環境調査と保存計画の立案	5.0	④ コレクション調査・環境調査と保存ニーズの把握	2.0	-3.0	2.0	3.0	④ 資料レベルの保存ニーズ査定と処置の選択	1.0	1.0	1.0	1.0
							⑤ コレクション・レベルの保存ニーズ査定	2.0	2.0	2.0	2.0
⑥ 保存プログラムの構成要素	2.0	⑤ 保存計画の立案と実行	2.0	0.0	2.0	2.0	⑦ 保存プログラムの策定	2.0	2.0	2.0	2.0
⑤ 防災計画	1.0	⑥ 防災計画	1.0	0.0	2.0	1.0	⑥ 災害と防災	2.0	2.0	2.0	2.0
⑦ 国内外の関連文献・情報源、専門機関、専門家、関係学協会等の情報	3.0	⑦ 国内外の関連文献・情報源、専門機関、関係学協会等の案内	3.0	0.0	3.0	5.0	⑧ 国内外の関連文献・情報源、専門機関、関係学協会等の案内	5.0	5.0	5.0	7.0
	26.0		25.0	-1.0	25.0	26.0		28.0	28.0	28.0	30.0

講義の内容項目へのコマ数の割り振りは表のとおりであるが、講師を受け持った２年目に若干の割り振りの修正が見て取れる。表４の2009年度の前年比の列に示す通り、当初４コマあった①（「資料保存の考え方」と「保存ニーズ調査」）のコマ数を減らした

一方で、②(「資料特性」「劣化要因」)と③(「予防と治療(保存対策)」)のコマ数を増やしている。これは初年度の教室での講義結果(履修者の反応等)をフィードバックした修正であろうか。その後、僅かな増減は見られるが、2012 ～ 2015年度はほぼ同じ構成で講義が行われており、講義すべき内容が確定したことがわかる(5)。

次に、安江氏の講義内容を、2016年度から講師を担当した青木睦氏の講義内容と比較するために各々のシラバスを示す(表５参照) (6)。

表５　安江講義(2015年度)と青木講義(2016年度)のシラバス比較

平成 27（2015）年度「安江講義」			平成 28（2016）年度「青木講義」		
	アーカイブズは収集した紙資料、デジタル記録等のコレクション（所蔵資料）を維持・管理し、その継続的な利用を保証することを任務とする。これらアーカイブズが基盤とする様々な記録史料のコンサベーション（維持・管理、補修等の手当て）とプリザベーション(保存マネジメント）について、その理論と実践を学ぶ。			本講義では、アーカイブズの保存のための物理的コントロールを中心的に講義する。アーカイブズ保存のための物理的コントロールの海外・国内の現状の事例を分析し、アーカイブズ保存情報が資源化されていく過程について明らかにし、物理的管理に必要となる情報は何であるのか､それはどのように生成され､集約化されていくのか、さらにどのように公開していくことが望ましいかを検討する。	
	講義内容は、1）記録史料保存の考え方、2）種々の記録史料の特性とその利用阻害要因、3）保存のための予防と治療、4）資料レベルの保存ニーズ査定と処置の選択、5）コレクション・レベルの保存ニーズ査定、6）保存プログラムの策定、7）災害と防災、8）国内外の関連文献・情報源、専門機関、関係学協会等の案内、を柱とする。 受講生がアーキビストに必要な記録史料保存の基本的知識と実践的素養を身につけることを目標としている。			アーカイブズ保存の目的は、アーカイブズの物理的原形をできる限り維持し、永続的に歴史的文化的資源として広く利用可能なよう、適切な保存・公開のシステムを構築することを学ぶ。さらに、今日的課題である被災したアーカイブズ保存措置・処置・修復については、実践的な経験の時間をとりつつ講義したい。 アーキビストに求められるプリザベーション・アドミニストレーター（保存担当者）としての保存に関する基本理論と実践的スキルを高めることを目標とする。	
	教室での講義形式が中心。関連して関係機関見学（学外）を実施する。また、紙資料補修実習（学内）を予定している。			教室での講義とともに実践形式の授業を実施する。関連して関係機関見学（学外）を実施する。また、紙資料修復実習（学外）を予定している。	
通し No.		講義内容	通し No.		講義内容
1	記録史料の保存（1）：コンサベーション	①	1	アーカイブズ保存とは	①
2	記録史料の保存（2）：プリザベーション	①	9	コンサベーションとプリザベーション	①
3	記録史料の素材：支持体・担体及びデジタルデータ	②	10	アーカイブズの支持体と構成：紙と紙以外の材料	②
4	記録史料の利用阻害要因：劣化損傷、機器・システムの旧式化、災害等	②	11	資料劣化の内的要因：前近代の紙	②
5	支持体としての紙：歴史、製法、種類、保存性	②	12	資料劣化の内的要因：近現代紙材料の種類と劣化	②
6	紙資料劣化の外的要因（1）：化学的要因と環境管理	②,③	14	資料劣化の外的要因：環境調査と制御	②

7	紙資料劣化の外的要因（2）：生物的要因とIPM（総合的有害生物管理）	②,③	17	予防的保存：環境管理とIPM（総合的有害生物管理）	③
8	紙資料劣化の外的要因（3）:物理的要因（取扱い等）とその対策	②,③			
9	紙資料劣化の内的要因（1）：酸・リグニンとその対策	②,③	18	予防的保存：長期保存紙、中和処理・脱酸、部分修復	③
10	紙資料劣化の内的要因（2）：酸・リグニンとその対策（続）	②,③			
11	紙資料劣化の内的要因（3）：担体の劣化とその対策	②,③			
12	紙資料の保存（1）：予防（容器収納等）	③	16	予防的保存：保存容器・資料の取扱い	③
13	紙資料の保存（2）：治療（補修等）	③	25	保存実演：保存措置の実践・保存容器の製作	⑨
			22	収蔵資料のメンテナンス：修復と修復・状態調書	③,④
14	紙資料の保存（3）：複製（マイクロ化とデジタル化）	③	19	予防的保存:代替（マイクロ化とデジタル化）	③
15	1学期まとめ	⑧	15	保存管理の実践：講義のまとめ	⑨
16	非紙資料の保存（1）：マイクロフィルムの劣化原因とその対策	②,③	13	資料劣化の内的要因：非紙資料・マイクロフィルムの劣化とデジタル情報	②,③
17	非紙資料の保存（2）：デジタル情報長期保存の課題	②,③			
18	保存ニーズ査定（資料レベル）と処置方法の選択	④	20	保存アセスメント：収蔵資料の状態調査、設備・業務管理	④,⑤
19	保存ニーズ査定(コレクション･レベル)(1):資料の状態調査	⑤			
20	保存ニーズ査定(コレクション･レベル)(2):環境調査と施設点検	⑤			
21	資料保存工房見学	⑧	23	資料修復現場の見学	⑨
22	保存プログラムの策定（1）：事例紹介／参照モデル	⑥	21	保存計画の策定・評価：事例紹介とプログラムモデル	⑥
23	保存プログラムの策定（2）：リスク管理／計画プロセス	⑥			
24	アーカイブズ機関見学	⑧	24	アーカイブズ機関見学	⑨
25	災害と防災（1）：災害の種類／防備と対処	⑦	2	災害とアーカイブズ:東日本大震災1組織(基礎自治体）アーカイブズ	⑦
26	災害と防災（2）：防災計画の立案	⑦	3	災害とアーカイブズ：東日本大震災2民間所在のアーカイブズ	⑦
			4	災害とアーカイブズ：危機管理と防災と減災計画	⑦
			5	災害とアーカイブズ：世界の被災とブルーシールド	⑦
			6	海外アーカイブズの建築と設備：最先端の事例	⑧
			7	日本のアーカイブズの建築と設備：アーカイブズと図書館・博物館の本質	⑧
			8	日本のアーカイブズの建築と設備：建築の現状と課題、中間保管庫の設計	⑧
			26	保存実演：展示設営と閲覧提供の実践	⑨
27	レポート発表（1）	⑧	27	レポート発表（1）	⑨
28	レポート発表（2）	⑧	28	レポート発表（2）	⑨
29	学年まとめ	⑧	29	学年まとめ	⑨
30	予備日				
番外	〔アーカイブズ保存ワークショップ－傷んだ文書を補修する／保存容器をつくる－2016/1/25〕	⑧			
	講義内容	コマ数		講義内容	コマ数
	① 記録史料保存の考え方	2.0		① 資料保存の考え方	2.0

② 種々の記録史料の特性とその利用阻害要因	7.0
③ 保存のための予防と治療	7.0
④ 資料レベルの保存ニーズ査定と処置の選択	1.0
⑤ コレクション・レベルの保存ニーズ査定	2.0
⑥ 保存プログラムの策定	2.0
⑦ 災害と防災	2.0
⑧ 国内外の関連文献・情報源、専門機関、関係学協会等の案内	7.0

② 資料の特性／利用阻害要因	4.5
③ 処置（予防／修復）	5.0
④ 保存ニーズ（資料レベル）	1.0
⑤ 保存ニーズ（コレクションレベル）	0.5
⑥ 保存計画	1.0
⑦ 災害と防災	4.0
⑧ 建築・設備	3.0
⑨ その他（アーカイブズ機関・修復工房の見学、保存実演、発表、まとめ）	8.0

表６　安江講義（2015年度）と青木講義（2016年度）の項目分類別コマ数の比較

平成 27（2015）年度「安江講義」			平成 28（2016）年度「青木講義」				
講義内容	a コマ数	b 構成比	講義内容	c コマ数	コマ数前年比 (c-a)	d 構成比	構成比前年比 (d-b)
① 記録史料保存の考え方	2.0	7%	① 資料保存の考え方	2.0	0.0	7%	0%
② 種々の記録史料の特性とその利用阻害要因	7.0	24%	② 資料の特性／利用阻害要因	4.5	-2.5	16%	-9%
③ 保存のための予防と治療	7.0	24%	③ 処置（予防／修復）	5.0	-2.0	17%	-7%
④ 資料レベルの保存ニーズ査定と処置の選択	1.0	3%	④ 保存ニーズ（資料レベル）	1.0	0.0	3%	0%
⑤ コレクション・レベルの保存ニーズ査定	2.0	7%	⑤ 保存ニーズ（コレクションレベル）	0.5	-1.5	2%	-5%
⑥ 保存プログラムの策定	2.0	7%	⑥ 保存計画	1.0	-1.0	3%	-3%
⑦ 災害と防災	2.0	7%	⑦ 災害と防災	4.0	2.0	14%	7%
⑧ 国内外の関連文献・情報源、専門機関、関係学協会等の案内〔レポート発表、まとめを含む〕	6.0	21%	⑧ 建築・設備	3.0	3.0	10%	10%
			⑨ その他（アーカイブズ機関・修復工房の見学、保存実演、発表、まとめ）	8.0	2.0	28%	7%
合計	29.0	100%	合計	29.0	0.0	100%	0%

表５の下部に示した分類項目別のコマ数の比較表のみを取り出したのが表６である。

青木氏の講義では、安江氏が設けていた②（利用阻害要因）、③（処置）、④⑤（保存ニーズ査定）等のコマ数が減る一方で、⑦（災害・防災）が倍増し、「建築・設備」という項目が新たに立てられている。

青木氏は国文学研究資料館主催のアーカイブズ資料に関する研修講座「アーカイブズカレッジ(7)」における資料保存科目の講師を長く担当しており、「建築・設備」論

もアーカイブズカレッジでの講義内容にすでに組み込まれていた。さらに、青木氏は多くの被災資料レスキュー活動に取り組んでおり、その方面の豊富な実績を考えれば「災害と防災」に多くのコマ数が割かれる理由は納得できよう(8)。

逆に見れば、安江氏の講義内容が、アーカイブズ資料の利用阻害要因や利用・保存のための予防と治療の内容を詳述するものであり、保存ニーズ査定により自館の使命と収蔵資料の状態を明確化し、各種施策をバランスよく実施する、マネジメントとしての資料保存（プリザベーション）に総合的、計画的に取り組むことの重要性を説くものであることがわかる。

以下では、先に挙げたテーマごとに、安江氏の思索・実践の変遷と結論をみていく。

１．２　酸性紙問題

紙で作られた資料（書籍・雑誌、記録文書等）が刊行（作成）後 50 ～ 100 年でボロボロに崩壊する、という「酸性紙問題」が大きな社会問題となり、そのことを誰もが知る契機となったものの一つが、当時日本書籍出版協会に勤務し製本家でもあった金谷博雄氏が自費出版した『本を残す－用紙の酸性問題資料集』という約 50 ページのパンフレットであった(9)。

安江氏にとって、このパンフレットから受けた衝撃は計り知れないほど甚大で深刻なものであった。特に、勤務先の NDL が我が国出版物の大半を半永久的に収蔵する「保存図書館」であるがゆえに、酸性紙はその使命の達成を阻む致命的な危機的要因となったのである。その危機の大きさから安江氏は、酸性紙問題を論じた最初の論考（著作物リスト No. 33）の中で、金谷パンフレットが出版された 1982 年を「酸性紙問題元年」と呼んだ。

周知の通り、紙を短期間で自壊させる原因の大きなものが、製紙過程で添加される硫酸アルミニウムなどの「酸」性物質であることを突き止め、その実験結果と対策を発表した（1959 年）のはアメリカの製本・修復家ウィリアム・バローである(10)。彼は原因追究のみならず、酸性劣化を抑制する対策としての脱酸（アルカリ成分の投入による中和処理）方法と長寿な紙を作るための仕様も提示した。

安江氏は、酸性紙問題の所在や原因と処方を一般社会へ認知させるのに功のあった、

バローと金谷氏の二人の業績を、酸性紙問題を契機として資料保存のパラダイムシフトをもたらした起点と位置付けており、特に高い評価を与えている(11)。

脱酸技術等の対策も含めた酸性紙問題に関わる安江氏の重要な著作物を挙げると以下となろう。なお、表記の西暦は著作物として発表された年、() 内の No. は表２「安江明夫著作物リスト」に付した通し番号である。

①「本」の寿命と保存図書館の役割－酸性紙問題によせて－　1983 年（No. 33）

②「永く残る本」にむけて－ウィリアム・J・バローの研究開発　1983 年（No. 39）

③紙の劣化と図書館資料の保存－シンポジウムの記録〔資料含〕－　1984 年（参考）

④本の保存の新しいパラダイム　1984 年（No. 48）

⑤書籍用紙の劣化－酸と保存環境の影響　1986 年（No. 54）

⑥蔵書劣化の謎を追う－スロー・ファイヤー探偵団の冒険　1990 年（No. 67）

⑦神話から科学へ－大量脱酸技術の再検討　1991 年（No. 74）

⑧総論　酸性紙問題から資料保存へ『図書館と資料保存』所収　1995 年（No. 80）

⑨大量脱酸技術の展望－マネジメントの視点から－ 2008 年（No. 104）

中でもエポックとなる著作に触れておく。

上記④では、酸性紙問題が図書館界だけでの解決が困難な普遍的な課題であること、すべての図書館のすべての蔵書を保存することが不可能であること、そこから、何を残すべきか（優先順位）、内容を残す（代替）、出版界との協同（中性紙による製本）といった、従来の資料保存の考え方の変革__パラダイムシフトが迫られているという認知に至り、上記⑧の、資料保存の新しい理解を説く総論につながる。

上記⑦では、過去に収集されてきた酸性紙資料に対する「遡及的対策」の切り札と考えられた「大量脱酸性化処理」の、作成から時間を経た「経年図書」への適用の有効性に疑問符を投げかけた。

大量脱酸性化処理のための大型プラントが国内に設置され稼働が始まった 2008 年に発表された上記⑨は、酸性紙問題、中でも大量脱酸技術に関する氏の集大成的な論考となった。そこで氏は、大量脱酸技術の歴史と現状を総括し、図書館とアーカイブズ機関における大量脱酸性化処理の「適用」に関する議論の少ないことを憂えつつ、

各機関がいかに取り組むべきかの論点整理を行っている。特にアーカイブズについては､｢簿冊｣形態の資料単体の中に多様な紙や記録材料(複写物等)が混在している実態、資料が唯一しか存在しない中で、後世に残すべきオリジナル資料は何か、他の保存施策（保管環境、代替等）との比較考量、組み合わせの検討を進めるべきとするその主張は、今も十分傾聴に値する。

１．３　資料保存概論

資料保存全般を扱った概論的な著作物は、NDL 退職（2006 年２月）後に執筆されるようになる。その主なものは下記の通りである。西暦は発表年、() 内は表２「著作物リスト」の通し番号。

①「資料保存」の章『新現代図書館学講座８　新訂　図書館資料論』所収　2008 年（No. 102）

②文化資源機関の保存マネジメント『図書館・博物館・文書館の連携』所収　2010 年（No. 122）

③アーカイブズ保存の考え方・進め方　2011 年（No. 126）

④講演　資料保存論（新・資料保存論）　2012 年（No. 129）

⑤資料保存の考え方と取り組み方　2012 年（No. 133）

⑥近現代紙資料の保存－図書館・アーカイブズの視点－　2016 年（No. 144）

⑦「遺す」でなく「活かす」：企業アーカイブズの本領　2016 年（No. 145）

⑧資料保存の why と what：企業ライブラリー篇　2018 年（No. 153）

その嚆矢となる上記①は、2008 年２月に刊行された『新現代図書館学講座８　新訂図書館資料論』の第９章として執筆された。この講座は図書館学を専攻する大学生向けの教科書や図書館司書講座のサブテキストとして編纂されたものであろうが、氏が執筆担当した第９章は、図書館資料に限らず、紙媒体資料を中核とするアーカイブズ資料にもそのまま適用可能な内容となっている。当書刊行２ヶ月後の 2008 年４月からは学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻における資料保存科目の講義が開始されている事実に照らせば、資料保存概論の執筆は、講義カリキュラム立案と重なる作業であったとも考えられる。

章の筋立ては、IFLA（国際図書館連盟）による「資料保存の原則」の制定・改訂の経緯から説き起こされ、現今の「資料保存」は「プリザベーション」すなわち、総合的な施策を駆使するマネジメント活動に他ならない、と位置づける。

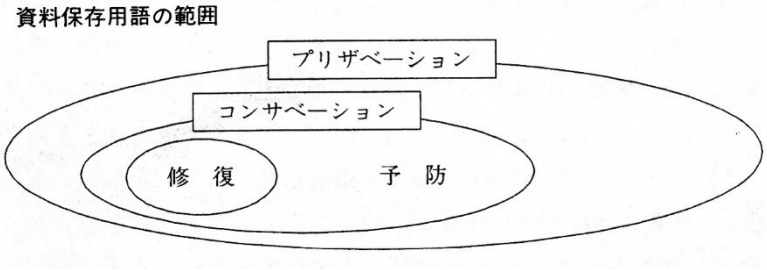
IFLA「資料保存の原則」は1979年に公表されたあと、1986年と1998年に改訂された。その後の動きは無いため、現時点での図書館界での資料保存の原則は1998年版が確定版となる(12)。

IFLA原則の制定・改訂の経緯に関する安江氏の言及は、上記①執筆から20年近く遡った1987年から始まっており（著作物リストNo.57「IFLAと資料保存」）、資料保存の考え方の変遷を説く際の「定石」となる。その系譜の論考は2008年に『文化財保存修復学会誌』で発表した「現代に生きる図書修復の思想」（著作物リストNo.100）で集大成するが、興味深いのは、氏が最も評価しているIFLA原則は最初の1979年版だという点である。上記①においても1979年版IFLA原則を「資料保存の記念碑的なドキュメント」とし、とりわけ重要な点として「コンサベーション（予防的保存）を前面に立てている」点と「修復の原則を提示した」点を挙げている。

1979年版に対する批判を受けて改訂された1986年版原則に関して安江氏が特筆すべき点としているのは、資料の保存修復を表す３つの用語Preservation、Conservation、Restorationに新しい定義を与えたことであり、安江氏は、この３つの用語の関係を図１のように図解した。

この図はさらに加筆修正されて2012年の「新・資料保存論」（著作物リストNo.129）には図２の形で掲載され、マネジメント活動としての「プリザベーション」の多様性、総合性を一目で理解できる視覚化が図られた。

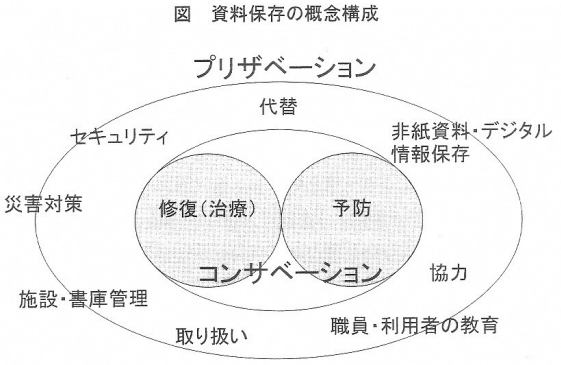
図１　資料保存用語の範囲(13)



なお、1998年原則については、上記①の最終節で取り上げ、これを「1986年版原則の骨格にしたがい、具体的な保存の処置・対策を肉づけたもの」とし「一部の保存担当者向けにではなく、すべての図書館職員に向けて作成された」ものとして、機関

のスタッフ全員がマネジメントの課題としての資料保存に取り組むべきことを結論としている。

図２　資料保存の概念構成(14)



その後も資料保存概論的な論考（自館の資料保存に如何に取り組むかの指南的著作を含む）が著されていくが、掲載誌の発行主体や、発表・講演を依頼する主体の業態のニーズに応じたバリエーションが出て来る。学習院大学院（アーカイブズ学専攻）の講師を担当していた時期（2008 ～ 2016 年）は、アーカイブズ機関向け（上記①、②）、図書館・アーカイブズの両機関向け（上記⑤、⑥）の論考が著され、講師退任後は、民間の企業内のライブラリーやアーカイブズ向けの論考も著す。これらは、企業史料協議会副会長や専門図書館協議会顧問といった役職就任の機縁で生まれたと言えよう。

それらバリエーションにおいても、資料保存は資料を利活用するために、自機関の「保存ニーズ」に応じて取り組むべきもの、という基本的なスタンスを堅持しつつ、特定の読者（聴衆）に向けて、彼らが帰属する組織の業態や与えられた使命に合わせた具体的な応用編として論を展開しているのである。

１．４　資料保存の施策としての「代替」（マイクロ化、デジタル化）

酸性紙への対策には大別して「中性紙」「代替」「脱酸」の３つがある。最初の「中性紙」は現在から未来に向けての「将来的保存」の切り札とされた対策であるが、1980 年代以降、出版社・製紙業界が酸性紙から中性紙への転換を進めた結果、近年出版される書籍・雑誌に使われる用紙の大半は中性紙となっている(15)。

「代替」と「脱酸」は、既存の酸性紙資料への対策である。これらは通常、劣化度に応じて使い分ける。すなわち、劣化がそれほど進行していない（余命が永い）酸性紙に対しては脱酸処理を施して寿命を延ばす。劣化がある程度進んだ（触っても崩壊しない程度の）酸性紙資料は、マイクロ化やデジタル化による代替（媒体変換）を行う。

実を言えば、酸性紙対策には、前述の３つ以外に「紙力強化」がある。これは、脆

弱化した紙資料（劣化が相当に進んだものも含む場合もあるかもしれない）を、例えば１枚づつ、極薄の和紙で裏打ち・表打ちすることで、紙の崩壊を防ぎ閲覧動作を可能とする修復の方法である[16]。

ところで、安江氏は、NDL 退職後の人生プランとして、資料保存に関する研究・コンサルティングを構想したはずだが、先ずはマイクロフィルムの問題に積極的に取り組んでいる（下記④以降）。その準備の意味もあってか、NDL 退職後の５ヶ月後に「アーカイブズカレッジ（国文学研究資料館主催の研修）」を受講し、そこで課される修了論文のテーマに「ビネガー・シンドロームとマイクロフィルムの長期保存」を選んでいる。

マイクロ化とデジタル化を含む「代替」に関わるテーマの主要な著作物は以下の通り。

①資料保存のニュー・フロンティア -- 国立国会図書館から　1990 年（No. 65）

②メディア変換の why と how　1999 年（No. 85）

③メディア時評 デジタル出版物の寿命　2000 年（No. 87）

④ビネガー・シンドローム問題再考－マイクロフィルムの保存のために　2006 年（No. 96）

⑤マイクロフィルムの保存計画－ビネガー・シンドローム対策を中心に　2007 年（No. 97）

⑥マイクロ資料の劣化 ： 原因と対処　2008 年（No. 101）

⑦《事例報告 1》「代替保存：過去・現在・未来」　2009 年（No. 108）

⑧マイクロ資料の保存状態調査　2009 年（No. 111）

⑨代替保存－これまでとこれから－ 『資料保存のための代替』所収　2010 年（No. 120）

⑩デジタル・スキャナーの活用－マイクロフィルムの利便性向上策　2011 年（No. 127）

そもそも「代替」という方策は、資料保存技術の中では「取り替える」技術として、「防ぐ（予防）」に次いで重要な技術とされた（「治す（修復）」技術は３番目とされた）。「防ぐ」「治す」がオリジナル資料に直接関わる技術である一方で「取り替える」はオ

リジナル資料の内容を別の媒体に変換し複製する技術である点が特色と言える。複製先の媒体としては「紙」「マイクロフィルム」「デジタルデータ」がある。安江氏は、在職時にNDLで実施された「明治期刊行図書マイクロ化計画」などもあり、またデジタルデータの長期保存性への懸念もあるためか、代替のための媒体としてはマイクロフィルムを最も重視している。さらに、大量にある対象資料の複製化のための複数機関の協力保存も論点に加わる。NDL退職直後にはマイクロフィルムの劣化（ビネガー・シンドローム）問題を多く取り上げたが、「代替」技術を資料保存上の大きなテーマとしてじっくりと向き合った集大成的な著作が上記⑨である。

この中で安江氏は、代替技術が資料保存の最も重要なパートナーの一つであり、資料の「現在と将来の利用を保証」し、さらには「資料の利用可能性を向上させる」ために「代替」技術は能動的・動態的機能を担うものである、とその重要性を説いている。

なお、現今では「代替」の主たる媒体となった「デジタルデータ」については、その長期保存の技術が発展途上であり、長期保存への顧慮なしに軽々にデジタル化に飛びつくことに警鐘を鳴らしている。利用可能性の高さからデジタル化が進む一方で、長期保存策が後回しになっている現状を改めて見直す必要がある。

１．５　保存ニーズ調査

図書館・アーカイブズ等の資料保存利用機関は、各々、設立に至る経緯・事情が個別にあり、与えられた使命がある。何を、何のために収蔵しているか、利用者のどのような求めに応じるべきなのか、安江氏はそれら「保存ニーズ」を明確にすることの重要性を繰り返し説いていた。ある時は、資料をモノとして物理的にとらえる前に、その「機能」を考えるべきという言い方もしている[17]。資料保存に関する具体的な技術論は世に多くあるが、それらの、どうすべきか（how）の技術論は、何を（what）、何のために（why）利用してもらい保存するかを明確にした後で考えるべきと説いた。資料保存に関わる諸施策はバラバラに実施している限り、場当たり的で、受動的な営為に終始する（壊れてしまったから治すという「修復」も受動的な営為の典型である）。これらを複合的、総合的、計画的に「マネジメント」してこそ、「プリザベーション」としての資料保存を能動的に推進することができる。それゆえに、大前提となるべき

「保存ニーズ」の把握が重視されたのである。

保存ニーズ調査に関する著作物として、以下が挙げられる。

①資料保存の how と why 再論　2000 年（No.88）

②『資料保存の調査と計画』 2009 年（Book05）

③保存自己査定（日本特別コレクション対象）≪ガイド≫　2017 年（No.151）

④「保存管理自己点検表」使用の手引き　第一版　2020 年（No.155）

上記②は、why「保存ニーズ」を明確化し、what「資料の状態」を調べるための「調査」の立案と実行を多様な機関の形態での調査実例を取り上げて具体的にサポートする実践の書である。あくまで、収蔵資料の状態調査は、目的を明確にした上で行うべきものであり、対策を打つための調査であるべきとした。

なお、晩年には、EAJRS 日本資料専門家欧州協会（上記③）や専門図書館協議会（上記④）など特定の業界に向けて、自館における資料保存への取り組みに関わる現状を確認し点検するためのツールとして「保存管理自己点検表」を公開し、保存ニーズ調査を具体的に進めるサポートを怠らなかった[18]。

１．６　資料防災

災害、特に地震、台風、豪雨、噴火等の大規模自然災害が文化財等に甚大なダメージを与える「大敵」であることは今日では常識である。しかるに被災した文化財等の救済が組織的に行われる端緒となったのは、1995 年１月に発生した阪神淡路大震災であり、さらに広域に及ぶ、複合的な被害をもたらした 2013 年３月の東日本大震災防災であった。

「阪神」以降著されるようになった災害への対処に関わる氏の主な著作物は以下の通り。

①図書館、文書館における災害対策（シリーズ本を残す⑦）　1998 年（Book04）

②「東京文書救援隊」発足のご挨拶　2011 年（No.128）

③蔵書の防災計画 ： 図書館の“must”　2012 年（No.131）

④ PARBICA 善き統治のためのレコードキーピング・ツールキット　ガイドライン 20 :「災害防備計画をつくる」日本語版　2020 年（No.157）

⑤同上　ガイドライン21：「災害対応計画をつくる」日本語版[19]　2021年（No.158）

資料保存機関において顧みられることの少なかった「資料防災」については、先ずは先進するアメリカの資料保存研究者サリー・ブキャナンによる基本文献の翻訳（上記①）が出版され、3.11後には資料防災の理論面をまとめた啓蒙的な論考（上記③）が発表された。

そして、図らずも氏の資料保存に関する最後の仕事となったのが、ICA（国際公文書館会議）PARBICA（太平洋支部）が作成した、アーカイブズ管理のためのツール中の資料防災に関わるガイドラインの日本語版監修（国立公文書館がWeb公開）であった。これは、アーカイブズ機関が資料防災計画を策定するための手順（ステップ）を解説するとともに、計画立案に必要なワークシートサンプルが添えられた実務的なガイドラインである。これを活用することで、一つでも多くの機関の資料防災計画の策定が進められ、災害による収蔵資料へのダメージが最小化されて収蔵資料の長期的利用・保存が図られることが望まれる。

なお、実践面では、3.11発災２ヶ月後に安江氏は、盟友・木部徹氏が設立した保存容器制作と資料修復のための工房（株式会社資料保存器材）のボランティア活動の形で始動した「東京文書救援隊」の代表者となる（上記②）。同隊は被災した水損資料の救済方法の具体的なメソドの紹介（現地での研修実施も含む）や救済実行のための各種ツール・資材の提供を行い、紙媒体資料のレスキューに大きく貢献した。

２　安江明夫氏の論考のバックグラウンド・特色（学ぶべき点）

以上、安江氏の「資料保存論」に関わる著作物を主要なテーマ別に概観してきた。以下では、その考え方を生み出したバックグラウンドを探り、氏の言説の特色（学ぶべき点）を考える。

２．１　バックグラウンド

①NDLに奉職していたこと

氏が長く奉職したNDLは唯一の国立の納本図書館であり基本的には日本国内で刊行

されたすべての出版物を収集し、それら収蔵資料を半永久的に保存する保存図書館としての使命を担っていた。なおかつ、日本の図書館のトップ機関として、国内の図書館に対して指導的な立場にあり、さらには国際的な図書館組織において資料保存に取り組む IFLA/PAC（Preservation And Conservation）のアジア地域センターを担当しており、資料保存に関わる課題への取り組みは率先して行う責務を担っていた。それらの事情が、安江氏を新しい資料保存のあり方を模索し、その探求・深化に駆り立てる原動力となったことが考えられる。

②酸性紙問題に遭遇したこと

酸性紙問題は、安江氏にとって NDL に入職して 13 年目（1982 年）にして遭遇した一大危機であった。翌 1983 年 7 月には NDL 内に酸性紙対策班がつくられ、氏はその班員として館蔵書の劣化状態調査に従事することとなる。1987 年 9 月からはアメリカ・コロンビア大学図書館学校に約 1 年間留学。帰国の翌年 1989 年 10 月には NDL 資料保存課長に就任、翌 1990 年には JLA 資料保存委員会の初代会長に就任といったあわただしい中、酸性紙問題の認知、NDL 蔵書の酸性劣化状態の把握、東京農工大の大江礼三郎研究室チームによる図書劣化調査への参加、全国図書館大会（資料保存分科会）や JLA の資料保存研究会から資料保存委員会に至る活動、その他、IFLA や海外諸国における資料保存への取り組みに接する中、酸性紙問題をどのようにとらえ、これにいかに取り組むかの思索と実践が続いたと考えられる。

③国際派であったこと

母国語以外に英語とフランス語を操るマルチリンガルであった氏は、NDL 在職中に海外勤務（1975 ～ 1978 のカナダ）と留学（1987 ～ 1988 のアメリカ）を経験しており、IFLA 等との交流にも関わる国際派であった（表 1 「年表」参照）。海外の図書館やアーカイブズ関連機関との交流を通じて、酸性紙問題を始めとする、資料保存に関する最新の動向、多くの知見を得ることが可能となり、資料保存に関する思索と実践の深化に寄与したことが考えられる。（もちろん、海外諸機関との交流の多くは NDL に在籍してこそありえたことであろう。）

④ NDL 退職後に務めた職務に関すること

氏が講師を務めた学習院大学院のアーカイブズ学専攻は、大学を卒業して進学した

プロパーの院生のみならず、すでに企業で活躍するビジネスパーソンや、アーカイブズ資料を扱う業務に関わったり、アーカイブズ機関に就業する者（筆者を含め）を多く受け入れていたと記憶する。それら多様な経歴を持ち切実な問題意識を持つ履修生との交流を通じて、アーカイブズに係る資料や機関が抱える課題やニーズの把握、実践や指導のあり方を深めることができたのではないか。また、図書館のみならず、アーカイブズにも及ぶ文化情報資源全般を包含する資料保存論の展開に繋がったであろう[20]。さらには、企業史料協議会や専門図書館協議会などの役員就任も、民間の企業分野への視野の広がりをもたらし、資料保存論のバリエーションを豊かにすることに繋がったと考えられる。

２．２　特色（学ぶべき点）

①「資料保存」の営為を資料保存機関の経営（マネジメント）にとって不可欠な活動と位置づけることで、受け身でなく、能動的に資料保存活動を進めることができるとしたこと。

②資料保存に取り組む際に先ず問われるべきは、機関や機関が収蔵する資料の「保存ニーズ」であるとしたこと。すなわち、各機関に与えられた「使命」などの「根本原理」「上位概念」に照らして今何をなすべきかを考えるべきとしたこと。（これは、最上位にある「経営理念」→「目標」の設定→「実施計画」立案、といった企業マネジメントのあり方を「資料保存」に適用したもの）

③資料保存においては「利用」と「保存」は対立する（資料を長期的に保存するためには、その利用を制限すべき等）という考え方を廃し、資料保存は「利用のための保存」に他ならず、資料保存の目的は「現在と未来の利用を保証する」ことと定義し、その定義を定着化させたこと。

④発言に際しては、課題を明確化し、論点整理をして、平易な表現を用い、明解な筋立てで、繰り返し説いたこと。

⑤固定観念やこだわりにとらわれないこと。長期的に残すべき蔵書は「すべて」なのか。「オリジナル」の資料を残すべきなのか。残すべきは「内容」ではないのか。とすれば「代替」物ではいけないのか。「こだわり」に対して疑問符を投げかけて、根

本原理に立ち返り、成すべきことを考え直したこと。

⑥広く諸外国の知見に目を向けたこと。酸性紙問題も、その解決策である大量脱酸技術も、資料保存に関わる課題は最新の情報も含めて海外に先例や知見があることが少なくない。

⑦技術論にこだわらず[21]、「機能」を重視したこと。

おわりに

安江氏は、資料保存にとって真に肝要なテーマを選び取り、それを平易な表現で、明解な筋立てでもって繰り返し我々に説き続けた。まさに、氏は資料保存の伝道師であり、導きの星であった。氏を失い、残された我々は自館の使命を全うするべく、収蔵資料の長期的な利用と保存を続けていかねばならない。資料保存に関わる課題は山積している。その「解」への道を示すヒントは氏が残した著作物の中に見え隠れしていよう。

例えば、酸性紙問題は、我々にとってすでに終わった話ではなく、未だ現在進行形の課題である。我々が収蔵する資料の中には、19 世紀後半（明治中・後期）から 20 世紀後半（昭和期）にかけて、砕木パルプと酸性サイズ剤を用いて製紙がおこなわれた約 100 年間に事務業務の記録や出版物の刊行のために官民で用いられた酸性紙が大量に残り、緩やかではあるが確実に劣化が進行している。ウィリアム・バローは、20 世紀前半に出版された図書で 21 世紀まで残るのは３％との調査報告を行ったが、すでに 21 世紀となって 20 年以上が経過した。実際のところ酸性紙の寿命、通常の閲覧が可能な強さを維持する余命はどれほどなのだろうか。それは、用いられた原材料の種類や保管された環境の状態によって大きく左右され、作成されてからの経過年数では一律に推し量ることは難しいのかもしれない。

大量脱酸性化処理の適用について先ず問うべきは「所蔵の酸性紙資料で、オリジナルの状態で館が１世紀後、２世紀後にも保存すべきものは何か」[22] であり、この問いに応えるためには、自館の使命と役割を問い直し（「保存ニーズ」を明確化し）、「代替」も含めた多様な保存施策を組み合わせる「マネジメント」が求められる。その際には「これまでの研究開発と経験を支えに将来を構想」し、収蔵する資料の「将来の

想定から逆算し、戦略的に計画を策定」していくべきとする氏の言葉をかみしめ、当館の収蔵資料と施設が100年後にどうあってほしいかに想いをめぐらしつつ、今何をすべきかを考え、日々の資料保存の実践を進めていきたい。

【注】

(1)　小出（安江）いずみ、小林直子「理論と実践、二刀流の軌跡　－安江明夫（資料保存関係）略年譜－」(『ネットワーク資料保存』第125号、日本図書館協会資料保存委員会、2021年10月発行（http://www.jla.or.jp/Portals/0/data/iinkai/hozon/network/NW125-2.pdf　2021年12月31日閲覧))。

(2)　表２「安江明夫　著作物リスト」はNDLの目録データベース「国立国会図書館サーチ（https://iss.ndl.go.jp/)」の検索結果をベースとして「略年譜（注１)」等を参考にしつつ、雑誌・書籍やWeb上のコンテンツ等で文字化されたものを可能な限り収録した。講演、大会、講義等での発表内容で文字化されていないものは収録していない。

(3)　平成16（2004）年度から同29（2017）年度までの大学院のシラバスは学習院大学のホームページで閲覧できる。学習院大学のトップページ＞キャンパスライフ＞シラバス・時間割について＞平成27（2015）年＞大学院科目＞人文科学研究科アーカイブズ学専攻＞アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅲ（https://www-cc.gakushuin.ac.jp/~s226510b/syllabus/kougi2015/index.html　2022年３月２日閲覧)。

(4)　2011年度までのシラバスでは、④資料レベルと⑤コレクション（資料群）レベルの「保存ニーズ査定」の２項目が１つのコマに集約されており、講義内容の数は７項目であった。

(5)　筆者が受講した平成23（2011）年度の講義を例にとると、実際に教室で進められた講義の内容はシラバスの通りではない部分もあった。この年度のシラバスは、東日本大震災発災前に大学側に提出されたものであったであろうことも影響したことが考えられる。

(6)　表５に示した青木氏の講義内容は、比較のため、シラバスに記載された並び順（通しNo.）を安江講義の内容に合わせる形に変更してある。

(7)　安江氏はNDL退職後の2006年７～９月にアーカイブズカレッジ長期コースを受講しているので、青木氏が講師を担当した資料保存科目のプログラム構成を知っていたであろう。

(8)　その後も青木氏の講義シラバスは変更を遂げる。2020年度には実習を含む「修復技術」に関するコマが増え、「保存ニーズ調査」等がさらに減ったものとなっている。

(9)　日本で初めて酸性紙問題がマスコミで報じられたのは、金谷博雄氏によれば1979年２月13日付け読売新聞の海外事情を紹介するコラム「世界の論調」欄であったという。その記事は、アメリカの雑誌『USニューズ＆ワールド・レポート』1979年２月12日号掲載「アメリカの図書館蔵書がぼろぼろに」の記事内容を抜粋引用する内容であった。

(10)　原書は、Randolph W. Church, ed. “Deterioration of book stock - Causesand Remedies; two studies on the permanence of book paper/ conducted by W. J. Barrow” Virginia State Library publication, No.10.1959.　安江氏は、上記書籍の内容を「永く残る本にむけて－ウィリアム・J・バローの研究開発－（1983年　著作物No.39)」で詳述するとともに、「書籍用紙を変革したコンサバター（2011年　著作物No.125)」でウィリアム・J・バローの業績を振り返る中で再び触れている。

(11)　酸性紙問題から資料保存の新しいあり方へ至る道程を総括した1995年の編著書『図書館と資料保存 ： 酸性紙問題からの10年の歩み』（著作物リストBook03）に掲載された「資料保存小史（世界と日本)」において、「世界」に関する事績としてはバロー・レポートの刊行、「日本」に関する事績としては金谷パンフレットの刊行、が小史記述の起点に据えられている。安江氏は二人の業績を評価し顕彰する論考として上記②とともに下記を著している。

・＜変革の保存学＞序説 － ウィリアム・バローと金谷博雄 －　1986年（著作物リストNo.55)

・書籍用紙を変革したコンサバター　2011 年（同上 No.125）

(12)　IFLA 原則の日本語版は 1986 年版が JLA 資料保存研究会メンバーによる翻訳に安江氏の序文と解説文（著作物リスト No.59 と 60）を付した「本を残す」シリーズの第１弾として JLA から刊行された。同書には 1979 年版の部分訳が掲載されている。1979 年版全文の日本語訳は、1982 年に『本を残す』を出版した金谷博雄氏による試訳が『コデックス通信』の別冊的な「資料 No. １」として 1986 年２月にコデックス会から刊行されているが、NDL にも収蔵されておらず、現時点では閲覧するのが困難である。1998 年版は JLA から『IFLA 図書館資料の予防的保存対策の原則』として刊行されているが、安江氏の関与の痕跡はなく、氏の盟友・木部徹氏が監修に当たっている。

(13)　「資料保存」『新現代図書館学講座８　新訂図書館資料論』、p.159

(14)　「講演　資料保存論（新・資料保存論）」、p.95

(15)　新刊図書の中性紙使用率は､NDL による調査（2008 年）では 95.8%である（『国立国会図書館月報』No.568、平成 20 年７月号、p.20 ～ 26）。この調査は 1986 年から開始されたが、当時 NDL 資料保存対策室の室員であった安江氏が調査を主導した。一方、官民の事務部門で用いられるコピー紙は現在ではその大半が再生紙である。再生紙は、pH は中性を示すものの古紙を含有するため、耐久性・耐用性はそれほど高くないと考えられる。

(16)　裏打ち以外に、漉嵌（リーフキャスティング）による強化、ペーパースプリットによる強化等の処置方法がある。（金山正子「少量の紙資料を対象とした保存処理」『紙と本の保存科学』岩田書院、2009 年）なお、安江氏は 1989 年（NDL 資料保存課長在任時）に「紙の強化法」の海外動向を紹介している（著作物リスト No.64）。

(17)　安江「資料保存の how と why 再論（2000 年　著作物 No.88）」の第２章で言及。

(18)　「保存管理自己点検表」とは別に、安江氏は定期的な資料の健康診断とも言える「定期保存点検表」の公開を予告していたが、それは果たされずに終わった。

(19)　３部作の最後となる「ガイドライン 22：災害復旧計画をつくる」日本語版は安江氏の衣鉢を継いで資料保存に取り組んでいる小島浩之氏の監修を受けて国

立公文書館のWebページからダウンロード公開された。(http://www.archives.go.jp/about/report/pdf/PARBICA_guideline_22_JP.pdf 2022年２月１日閲覧)。

(20)　すでに1980年代後半の全国図書館大会資料保存分科会においては、図書館勤務者のみならず、大学や関連企業はもとより、保存科学研究者やアーカイブズ機関の研究者が参加し現状報告を行っている事実（紙を媒介とした「横」の交流）が大会記録で確認できる。

(21)　旧来の資料保存において中心的であった「修復」における技術的な課題（例えば、資料の破損個所をいかに美しく修復するか）に関して安江氏は、重視しないスタンスをとっていたように見受ける。これは、修復はできれば行わない、どうしてもそれを行なわない訳にはいかない場合にのみ必要最低限の範囲で行う、というIFLA1979年原則に示された考え方（６．２条）を重視した結果であり、「修復」に偏した資料保存が「受け身」の営為となりがちであった状況を変えたかったからではないか。あるいは、「修復」といった、職人芸とも言うべき技術面に対する安江氏のスタンスについては、氏の実家（石川県金沢市）で父親や兄弟が金箔職人であった点が何か関係しているのだろうか。家業の影響という面では、家内で行われていたであろう「製紙」が氏の「紙」への関心を引いた可能性が「略年譜」でも触れられている。(金箔の製造においては、箔と箔の間に挟み込む間紙の品質が極めて大きく影響するため、金箔職人の多くは自分で間紙を作るのだという。「会長インタビュー　石川県金沢市立安江金箔工芸館を訪ねて」『N・Wave』No.110、2019年９月、日本建設株式会社、ｐ．６よりhttps://www.nihonkensetsu.co.jp/publications/2021-%e7%a7%8b-vol-118-13/ 2022年２月１日閲覧)。

(22)　以下「」内は安江「大量脱酸技術の展望ーマネジメントの視点からー」（著作物No.104）より引用。

（本稿執筆にあたりましては、著作物リスト・年表の内容確認をはじめ、事実関係等に関するご指摘をいただきました安江いずみ様にお礼を申し上げます。）